

---

# 瑠璃色アラカルト

川中流一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

瑠璃色アラカルト

### 【Nコード】

N3394S

### 【作者名】

川中流一

### 【あらすじ】

瑠璃色シリーズ番外集。

## 一・（前書き）

これは天が生まれる前の、お父さんとお母さんのお話です。あと少し、御執事様。  
ぴいという雀のいました。

一・

「ぴい、ご飯ですよー」

ぴい、とそれは返事をして、片翼だけばたつかせちょんちょんと跳ね寄った。

++

見つけたのは、庭の茂みだった。旦那様とお散歩をしている時に、ぴいと鳴く音が聞こえた。鳥の鳴く声があるのは不思議な事でないのに旦那様は立ち止まり、ちらと脇に目をやった。石畳を外れて土の方へ向かう。ちよっと戸惑ったが、自分もおずおずと従いて行った。

青々した茂みに屈み、その葉をがさと手で押しのける。肩越しに見ると、すずめの子が土の上で横になっているのが見えた。あ、と口元に手をやって驚く。

「るり、鳥が寝るのを初めて見ました」

可愛い、と顔が緩むが、旦那様のお口元はいつもらしい微笑をしていなかった。

「怪我をしているな……」

「え」

吃驚してよく見ると、上になっている羽が奇妙に曲がっている気がした。傍には短い羽が幾らか散らばっている。

「小鳥さんが……」

ちらりと旦那様が流した片目と合う。すると旦那様は、それを丁寧な手つきで片手で掬った。手の上で、ぴい……と弱弱しく嘴を動かした。

旦那様は何も言わずに、それを掬ったまま歩いてきた道を引き返して行った。

ピイイイイ！

小鳥は叫ぶような鳴き声を上げる。旦那様が片翼をぱき、と折るような手つきをしたのだ。

「だ、旦那様！」

それまで医者が患者を看るような冷静な瞳で確かめるように軽く触っていたのに、その突然の行為に吃驚し慌てて諫める。

「ただ旦那様は動じず、変わらぬ冷静さで羽に小板を当てる。先ほど小刀で板版から切り取ったものだ。裂いた包帯をすると巻いて、最後にきゅ、と縛った。」

「あ……」

何を作っているんだろうと思ったけれど、小鳥は骨折をした人間のように当て木をされ包帯で固定されていた。

「ありがとうございます、旦那様」

嬉しくて微笑む旦那様はやっとくすりと笑った。

「お前がすすめみたいだな、瑠璃」

「嘴の下辺りを優しくくすぐ撫るのを見て、ちよつと羨ましくなった。」

「るりが恩返しをします、旦那様」

小鳥になったので大胆に膝の上によじ上がり肩に手を置いて、ちゅ、と頬に啄ばむような接吻をした。旦那様は笑って片手で抱きながら頭を撫でてくれた。

「旦那様はとても優しい……」

目を瞑って暖かさを求めるように胸に顔を埋めてくる。幸せそうに微笑む女の頭を撫でながら、男も満足気な微笑みを漏らした。

お前が優しい男を望むなら……



前にもこんなことがあったよなあ……

男は窓辺を見ながら軽く溜息を吐いた。

仕事は終わった。なのにあいつは、背を向けて小鳥と遊んでいる。遊んでいるというか、庭に放した子すずめがぴよんぴよん跳ねるのを縁側に座って眺めているのだが。

暫くは小鳥の包帯は外れない、だろう。小鳥が骨を折ったら治るのはどれくらいだ、なんて医者に訊ける訳がない。お優しいなどと誤解をさせるのはあいつだけで十分だ。

実際、野生の小鳥が羽を痛めたからといって俺が政務の間を縫いまめに世話をしてやる筈がない。もしもそんな男がいたら相当に痛ましい、独り身の男だろう。

それなのにあいつは、瑠璃が代わりにお世話します、などと言って、まるで俺から託されたようにせつせと付きっ切りで世話をしている。

瑠璃、そう呼んで振り向かせたいが、それでは俺が嫉妬をしているみたいじゃねえか。片手で捻りつぶせそうな、あんな小さな生き物如きに。

珈琲は、なんて言うのは止めて、軽く伸びをした。風呂でも浴びて来よう。

かたと椅子を引いて立ち上がると、気配に気づいたのかふいに瑠璃が振り返った。

「あ、旦那様。お仕事の終わりですか」

ああ、と答えると、申し訳なさに眉を下げながら立ち上がる。

「ごめんなさい、るり、気の付かなくて……すぐにお珈琲をお持ちします」

「いい。それより、お前も風呂を浴びにいくか？」

「あ、はい。お背中お流します」  
そう言つて、またいそいそと縁側に向かい、屈んだ。小雀を傍に置いた小箱に掬い入れるのだらう。待つてはやらずに、先に部屋を出て行つた。

ざばりと桶の水を背中に掛ける。熱い湯が身を痺れさせた。

……あいつ、まだかな。と思つたが、そのまま何もせずにただ座つているのもまるで余程背中を流して貰いたいように見えるので、目の前に置いてある石鹸を手に取つた。

それにしても、寂しい風呂場だ。十数人は悠に入れるところを、一人静かに綿布に石鹸を擦り付けている。肌寒い。早く風呂に浸かりてえな。

自分一人の為に沸かされた湯なので、先に体を洗う意味は余り無いのかもしれないが、それは身についた順序だ。

ああ、そうだ。広い風呂だなんて、可笑しい。以前は思わなかつた……あいつが俺の前に現れて、湯処までくつついてくるようになるまでは。

物心が付いてからは、背流しの侍女も入れず一人で済ませてきた……いや、母上が亡くなつてからか。それまでは何も考えずされるがままに身の回りの世話をさせていたが、人を遠ざけ全て一人でするようになつた。そうしてしまえばそれが当然の事だ。

今になれば、何をするにも仮面を被つていたことが信じられない。眠る時まで自らを躡けて、今でも鼾どころか寝返りすら打たない。朝起きれば寝た時と寸分変わらぬ天井が見えた。だが今では……代わりに銀色の小さな旋毛つむじがある。

愛おしい。

一目見て興味はあつたが、まさか小姓如きに心奪われるということはないだらう。一体いつから初めて、からんと音がした。



丁度湯に片足を入れた時だ。一枚白い肌衣を身に着けた女が入って来たが、知らん振りをして熱い湯に身を沈める。

二段にも桶を前に抱えて、顔も見えなかったがあゝ滑稽な仕草で分かる。いや、滑稽と言ったら可哀想か。貴族のようにしゃなりと気取らない、女のようにくねりと媚びない、子供のように自然で愛らしい動作だ。くす、と口元は笑って、丁度よい湯加減に体はほぐれていく。

ひたひたと背中中で音を聞いて、すぐ背後で止まったが気づいてやらない。

「旦那様……」

不安な声に何故か顔が緩んでしまう。さあどうする？ 機嫌を損ねた振りをしてやろうかな。

「ごめんなさい。るり、遅くなっちゃって、」

犬だったらしよぼんと耳を垂れているに違いない。仕置きだと言つて苛めてやろうか。

「旦那様、お酒の飲みますか」

白い手が差し伸びて、ちょこがちょこんと乗っている。陶器の中の透明な液体は、喉を冷たく潤すだろう。相変わらず背を向けたまま、それを手に取って口に付ける。

ああ、旨い。

知っているか？ 毒見もさせずに酒を受け取るのは、お前からだけなんだぜ。

「瑠璃、入れ」

優しい声になってしまわないように気を付けて、顔に無表情を貼り付けて、促す。そうすればあいつは、はい、旦那様、と言って横に足を差し出す。ぽちゃんと爪先が湯に輪を描いた。

こいつは何でも、一言目ではいと言って従う。これが侍女だったなら戸惑って、未だ体を洗っていませんのでとか若君と一緒に湯に浸かるなど、と少なくとも一度は断ってみせる。まあ当然か。だが妻だとしてもこれが貴族だったなら、貴族だったら夫の背など

流さない。少なくともそれが皇族の女なら使用人の真似事など絶対にしないだろう。身は落ちて心は気高いままだと、突っ撥ねるに違いない。

「……あ」

やっと声を漏らした。膝に乗せて、前を向かせたまま胸を揉んでいる。薄い肌衣が女の肌に吸い付くように張り付いて体の線が浮き出させている。ただの裸よりずっと色っぽいだろう？相変わらず肌衣の上から、だが敏感な先端部を摘まんで引つ張ると、ぴんと背が弓なりになった。可愛いな。本当だったら湯に溺れていくくらい感じさせてやりたいが、目的は焦らすだけだ。仕方ない。可愛いからといって賤を甘やかしてはいけない。

「旦那、様……」

もういいか。こいつはあまり反応を示さない。というか我慢している。主人に感情を示してはいけないように育てられた所為で、我を失うのを恐れ、気持ちよく感じてしまうことに抵抗を持っている。だが決して感じにくい体だという訳ではない。それどころか。

「ふ、」

僅かに足を摺り合わせたのを見逃さず、腿の隙間に手を入れ銀色の毛並みを逆撫で指が触れる。くちゅんと音が聞こえてきそうな纏わりを感じ、流石ににやりと口元が上がる。

中まで弄りたいところだが、堪え性もなくすぐに達してしまうので確かめるだけだ。指には湯とは別の、とろりとした液体が絡み付いていた。それは目の前に持つていく。顎を引いて小さく俯いたから、きつと顔は真っ赤になって瞳は泣きそうな、羞恥でいっぱい表情をしているだろう。

「淫乱」

びくりと細い肩が跳ね、体がぶるぶると震え出した。泣いてしまっかな。

頭を撫でてやると、震えが落ち着いていくのが手に取るように分かって楽しい。

「瑠璃、俺が洗ってやる」

はい、旦那様、とやはりまだ恥じ入った小さな声で答えた。どうしてずっとこのまま、まるで生娘のようでいられるんだろう。

変わらない、拒まない、まるで人形のような

可愛い俺の瑠璃。

三・

「おやすみなさい、ぴい」

微笑んで、白魚のように繊細な指で不器用に羽を撫でる。

鳥はぴい、と鳴いた。

女は綿布わたぬのを敷き詰め穴を開けた木箱に大事そうに蓋をする。そして男が身を起こしているベットにいつものように上がりこもうとしたが

「待て」

男が制すると同時に女はぴたりと止まり、手を付き片足を上げた格好で言われた通りに待った。

「それを片付けて来い」

それ、とは何のことか分からずにきょとんとした。

「その鳥だ」

「え」と吃驚した。

「けれどぴいは怪我をしていて、まだ赤ちゃんで、」

「過保護なんだよ、お前は」

「あの、旦那様……」

「何だ」

おずおずと下から見上げている。

「抱きませんで、ぴいも一緒に」

抱くのを我慢するだと？ 眩暈がした。

「俺はな、瑠璃。お前以外の生き物を寝室に入れて寝た事はないし寝るつもりもない」

しょぼんとする。しかし事実だ。つーか寝れねえんだよ。

俺は一人でないと眠れない。遊郭でだって、元の妻だって、腕に抱いて朝を越した事はない。人の気配があると眠れない。遊郭じゃ抱いても寝る布団は別に用意させるから、それが女を気に入らなか

ったように解されて女泣かせと言われたが、別にそういう訳じゃない。というか気に入ってなかったら初めから抱いてない。だがしかし。

眠れない。

などと言うよりはその誤解の方がまだましで、結果的に女をとつかえひつかえする様になってしまった。

だからお前はどれだけ特別な存在か分かるか？瑠璃。

冷静に分析すれば、それはこいつが初めあまりに人間味が無く俺も慣習に習い人形同然の目で見ていたから、と理由付けはできるかもしれないが。

とにかく、

「置いて来い」

寝室には誰も何も入れさせない。

唯一例外は、この世に瑠璃だけだ。

しょぼんとしたまま、しょぼしょぼ戻って、木箱を抱える。

「どこに……」

「執務室でも居間でもどこでもいい」

自室、と言える部屋は何室にも分かれ繋がりとまって、一軒の家のようにもなっている。母屋と廊下で繋がってはいるが、離れのようなものだ。他には食堂が廊下を介し台所と繋がって料理を運ぶ使用人が行き来できるようになっている。

しょぼくれたままぱたんと扉を閉めた。

そしてあいつは戻ってこなかった。

朝、居間のソファで、瑠璃の胸辺りをちゅんちゅん飛び跳ねているのを見た。

瑠璃は蓋の開いた木箱を大事そうに抱えてぐっすりと眠っている。微笑んでいた。

ち、と舌打ち、毛布をばさりと掛ける。鳥がびっくりしてぴいぴい鳴いた。

「ん……ぴい」

眠りながら微笑む。耳元で甲高い音が鳴っているというのに、寝つきの良い奴だ。

放って朝食の席に着いた。

椅子を引き傍に立った川野が、瑠璃様は、と訊いてきたので寝ている、と答えた。別に変わらぬ口調で表情を変えもしないが、推察できそうなそれもさして重要でないことをこいつが敢えて訊いてくるといことはそれだけで意味を含んでいて、僅かに苛立った。

この俺に、嗜めているのだ。

仕方ないだろう。あんなに幸せそうな寝顔を崩してしまえる人間がいるのか。少なくとも男である限りは無理だ。それに起きれなくたって仕方ないだろう。俺の朝は比較的早い。冬ならばまだ灯りが要る時間だ。目覚ましも置かないし、あいつは寝付きが良くて朝日とともに目覚めるんだ。西欧寓話の妖精のように……ふ、と顔が自然に緩む。

「若君、今日の御予定は……」

朝食を済ませたら、瑠璃の寝顔を見に行く。うん、と目を覚ましかけたらぶにと頬をつついて、起こしてやる。目を擦りながら寝ぼけ眼で、それからはつとしてまた俺より遅く起きた事を申し訳なさそうに詫びる。るりはきちんと起きなければなりません、と自分をき、と戒めて、その変化に富む表情を見ているだけで癒される。

「新春祝の鶯茶会が御前にて催されますので、宮内省行事御予算振分の件がお済になられましたらお着替えのご準備を　これは若君がご出席しなければ大事です」

嫌そうな顔をしたら、淡々と念を押される。仏頂面で呟く。

「……瑠璃も連れて行こう」

「それはなりません、若君。知つての通り、御上は異国を毛嫌いしており、国賓に招かれても同じ席に着いた事はありません。瑠璃様の御容貌ですと」

睨む。

「ご無礼な態度をお取り為さり瑠璃様がお気を悪くするやもしれません。それに若君、今事を荒げるのは得策ではないかと……」  
ち、と舌打った。元の妻を追いやってから当然の如く皇族連中との関係は悪化している。それもえりかは今上天皇の従姉とかで随分慕われ、公ではないが結婚を申し込まれた程だと聞く。聞かされたそして決まった人がいるとか言つて恐れ多くも断つたとか。知るかよ。受けておけばいいだろ。皇族の女は気位が高い。上流貴族に嫁いでも夫は見下されると聞く。だから大抵妾を抱えそして更に悪化だったら初めから　なんて言えた義理じゃねえ。兎に角、天皇の正妻なんて願つても無い話じゃねえか。

まあどうでもいい。

貴族と皇族の違いは、あからさまな媚を売ってくるかこないか程の差異だ。内政外政など関心も持たず、ただ宮廷の行事毎に立ち位置上下ばかり気にしている無能に変わりは無い。

「分かっている」

手早く食事を済ませ、口元を拭いた。そして執事をちらと見る。

「それと、川野」

#### 四・

ぷちゅ、と人差し指を唇に入れてみた。僅かに開いていた桜色の唇は、啜えるように窄み<sup>すぼ</sup>それを食み始める。なんとも微笑まじげだったが、かり、と噛んだので指を差し抜いた。

「ん……るりのごはん」

目を覚まして、焦点も合わないぼんやりとした目で俺の顔を見る。るり、よい子にしていました……」

「ああ、そうだな」

よしよしと頭を撫でると、気持ち良さ気に瞳はとろんとした。

「るりは小鳥になって、旦那様に飼われています……とても大切に

……」

そしてまた夢の世界に向かって長い睫が下を向いていった。

「お目覚めくださいませ、瑠璃様」

ばかりと瞼が上がった。跳ねるように起き上がり、後ろに立っている執事の姿を見るや否やソファの上で正座する。

「ご、ご御執事様、お早うございます」

「……」

執事は何も答えず、手前へと目配せする。ちょっと不機嫌になっている主人の顔があった。

「お、お早うございます、御主……旦那様」

焦り焦り手を前につき、茶法で言う所の『真』の礼をした。

顔を上げると、背後に立つ執事にちらちらと眼球が動く。その度に細かく居ずまいを正した。

「どういうことだ、川野……何故お前にこんなに怯えている」

「存じません、若君」

僅かに低くなった声にしらりとして答えたが、男は沈黙で命じる。



「瑠璃様が小姓だった折、若君がご家族様とご朝食の席に着いておられる間に私が瑠璃様を起こし差し上げ、身の振る舞いについて少々の手解きをしておりました」

「聞いてねえ」

「お耳に入れる程の事ではありません。そもそも、霧崎家に仕えるのならば例え貴族の子女であつても初めに心得てもらふような最低の事です。それをお教えもしないのは返つて瑠璃様に恥をかせることになると思い、お力添えをしたまででございます」

顔を顰めたままだったが、今更言い争つても仕方のない事だった。  
「万事私にお任せくださいませ、若君」  
ち、と言つて男は立つ。

「旦那様……？」

不安気に見上げると、男は微笑む。

「いい子にしているんだぞ、瑠璃」

頭を撫でると、そうして行つてしまふ。

「あ、旦那様、どこに」

立ち上がるが、執事が目に入り追いかけるのを止める。

「行つてらっしゃいませ、旦那様……」  
しょぼんと頭を垂れた。

ぴい、と小鳥の声がして、はつと振り向く。ソファの縁に居て危うく落ちそうだったのを手で掬い箱に入れた。蓋を閉め隠すようにソファの陰に置く。慌てて顔を窺った。

若君は虫や動物の生き物を飼うのを好まないが……

人間のように巻かれていた包帯を見、大体の事の察しはついた。若君の了承を得ているのならば別に捨てさせる程の事ではない。尤も、それ位は察してせめて庭で飼うとか使用人に任せるとかいった気は使つて欲しいところだが。羽の一枚でも落ちていないよう、掃除をしなければ。

「るり、お着替えをしなければ……」

言い訳のように独り言をして、そそくさと逃げようとする。

「御食堂にてご朝食を準備してお待ちしております、瑠璃様」

ぴく、と耳を動かして一瞬止まり、諦めたようにすごすごとクロ―ゼットの中へと入って行く。洋服を召されませ、と背に向かって声を掛けた。

引かれた席に座るが、う、と手出ない。

皿。両脇にナイフ、フォーク、スプーンがじゃらじゃら。ガラスのグラスが二つ。一つは氷が浮き水が入っているようだ。

「洋食を召し上がって頂きます、瑠璃様」

脇に執事が立っている。

銀の丸い蓋を開けた。良く分からない薄茶色の円盤のもの。それでも食べるより仕方なく、恐る恐る手前の使いやすそうなフォークに手を伸ばす。

「外側からお使い下さいませ、瑠璃様」

びくりと手を止めるが、一番外側にあるナイフを取るのか、その次のフォークを使うのか分からない。

軽い溜息が聞こえた。

「瑠璃様、若君は懇意にされている英国皇太子御夫妻から御食事の招待を受け、瑠璃様とご一緒に御出席なさるおつもりです」

口では離れたくないと言っても実際は政治に関わるような場に出したことは無いに等しい。しかし、割と気の合ったらしい友人という事もあり、きっと自慢でもして引くに引けなくなったのだろう。全く困ったものだ。

その自慢の寵姫といえば、え、とぼかんと口を開けている。

しかし、何はどうあれ若君に恥をかかせる訳にはいかない。

「ご安心ください。私が異国のテーブルマナーを教えて差し上げます」

「てえぶる…… るり、少し、戻ってもよいですか。ぴいにごは

んをあげたらすぐに戻りますので、」

「お食事中に席を立てはなりません、瑠璃様。次のメニューを止めてしまうことになります」

引いた椅子がかたと戻され、う、と目の前の得体の知れないものを見つめる。

「何も私は鬼ではありません。お食事がお済みになられましたら、存分に餌を用意させます」

仕方なく、ナイフを選んでみた。こくんと頷いたので、それをぐぬりと差し込んだ。

そして執事の目が鷹の目のように眇められた。

## 五・

帰って来ると、食堂に青いイブニングドレスの女と執事がいた。

「若君、お帰りなさいませ」

「お、お帰りなさいませ、旦那様」

皿にはデザートが出ている。

「なんだ、もう食べ終わるのか」

夕食は一緒に取れるかと思ったんだがな、と言うと、何故か女は首を赤くした。執事が説明する。

「いえ、瑠璃様は御朝食の最中です。これが終わりましたら、すぐに夕食の準備を整えさせます」

「はあ？」

身を縮こませて恥じている女を見て取る。つかつか歩み寄って、桃色のベリーソースの上に乗っている薄いムースケーキを摘み上げ口に放り込んだ。あ。と両方が驚く。

「瑠璃のやつの方が美味しいな」

「だ、旦那様……」

ぽつと顔を染めるのを心の中で厭きれていると、鋭く睨まれる。

「俺を待たせるな」

「かしこまりました、若君」

礼をして、食器を下げた。

「瑠璃様は意外と　いえ、流石に飲み込みが早くていらっしやる。一週間私にお任せくだされば、形はそれなりの淑女にして差し上げられます」

女は漸く解放されて、一目散というように鳥に餌をやりに行った。男は居間でばらばらと英字新聞を捲っている。

「俺は型に嵌っていない瑠璃が好きなんだ。俺やお前じゃもう手遅

れだけどな」

「お言葉ながら、若君は純粹さに憧れと幻想を抱いていらつしやいます。しかしそれはただ幼稚と紙一重か同類のものとお心にお留め下さいませ」

「留めているさ」

くす、と男は笑った。どこか寂しそうにも見えた。

「瑠璃がしたいと言うならいいだろう」

「ぴい……るり、怒られてしまいました。たくさんに」

お米を潰したものを箸で嘴に入れてやる。美味しそうに片翼をばたつかせて飲み込んだ。

微笑んで、次々に入れてやる。何も知らず、ぴいぴいと嬉しそうに喜んだ。

「ぴいはとても可愛いです」

頭を柔らかく撫でてやった。

今日も出掛けてしまった。春先は出席しなければならぬ行事が多いそうだ。待つことなら慣れている。家に居ても、たくさんお仕事があるから。それに、今はぴいがいる。だけど

「るりは今日は何をしますか、御執事様」

「いつも通り、何もしなくて結構です」

そっけなく答えた。う、と俯く。

「ですがもしも」

ちらりと見下ろして、口を開く。

「瑠璃様が若君に相応しいお方に近づきたいというのなら、喜んでお手伝い差し上げますが」

「お相応しい……るりがえりか様のように……？」

「それは無理です。生まれ育った気品というのは今更捨てられるも

のでも身につけられるものでもありません」

うぐ、と言うのを構わず執事は淡々と続ける。

「ですが、少なくとも平民がこの霧崎の敷居を踏める程度にはお仕上げできます。あの竜之介様に作法のいろはをお教えさせて頂いたのも私でございます」

まあ、竜之介様は高貴な血も持ちまだ少年の頃の事でしたが、と付け加えるが、女は何か衝撃を受けたように聞いていなかった。

「りゅうが……」

旦那様のお役に立っている。とても。今のりはあまりお役に立っていない。旦那様も前よりたくさんはお構いにならなくなつた。

女には漠然とした不安の塵が積もっていた。

「ですがこれは返つて瑠璃様に優位のことかもしれません」

「え」

「若君は上質なものには見飽きている……ふと、土に転がる石ころを手にとつてみたくなるのでしょう。または、一時期外来ものであるワインをお気に召されコレクションをした事がありました。尤も、やはり茶器には劣るという結論に落ち着いた様ですが」

「石ころ、これくつしよん」

神妙にうんと頷くが、分かつてなどいない。成程、思わず笑みが漏れてしまいそうだ。

「洗練され尽くした若君に取つて、鍍金メッキのごとき小細工は無用

かと思われませんが、若君は意外と懸命なお姿には弱いのです。また、御自身が賞賛されてもそれは分かりきつた事です、それがお持ち物ですと割と素直にお喜びになります。若君の秀麗さは天賦のものですが、お持ち物は若君の選ばれたものだからでしょう」

見ると女は眉間を寄せて、懸命に言葉の意味を理解しようとしている。言葉を並べる程飲みこみ難いのだろうと気づいて、もう十分だろうと言葉を切った。

「という訳で、瑠璃様が多少なりとも若君の為に作法を身に着

ければ、ますますのご寵愛を受けられるでしょう」

「るりは頑張ればよいのですか」

「そうということです」

すっかりと真剣な顔つきになって、先程までの様にびくつくことなく真っ直ぐ自分を見つめ上げている。銀色の瞳は朝一面に降り積もった雪を連想させるように、一点の穢れもなく光を輝かせていた。初めて執事は、生まれが惜しいことだ。と別の感情を持ってその瞳を見返していた。

「私にお任せください、瑠璃様。若君の好みの把握において私の右に出る者はありません」

女はその場に正座をして、手を床につける。

「るりを宜しくお願い致します、御執事様」

「かしこまりました」

執事も胸に手を当て、頭を下げる。

「瑠璃様は私が誠意を込めて御調教して差し上げます」

あいつが心配だな、と男は思った。

瑠璃の意思なら俺が止められることではないと言ったが、何か言いくるめられて自分の意思のようにさせられているかもしれない。

思えば『扇子』として引取った頃から、あいつはよくよく俺に教育させて欲しいと言って来た。確かにあいつの手にかかると芋のような平民の子も高慢が抜けない貴族の子も、少なくとも表面上は身の振りが一様になり、押し並べて礼節丁寧で従順なこの家の召使になった。

だが俺は瑠璃にそうなられたら嫌だ……

茶を点てながら、男は空を乞うように見上げた。





## 六・

「ただいま、瑠璃」

しゃがんでいるその上から、ふわりと抱く。くすぐる髪越しに覗くと、女は鳥に餌をやっている最中だった。何か橙と茶を合わせた色の、小さく千切られたものを箸で摘み、こちらに向けて精一杯開ける嘴の中に将に入れようとしていた。しかしふわりと香った甘い匂いにその手を上から被せて止める。

「待て」

「あ、旦那様。お帰りなさいませ」

女は微笑んだ。

「旦那様もびいにごはんをおやりになりますか」

「それはなんだ」

「きやらめると言います。くにくにして甘く、とても美味しいものです」

「それはやるな。病気になる」

「え」

吃驚してぼろんと落とす。

「猫に砂糖をやって病気にした奴がある。人間でさえ摂取を過ぎると体に毒だ。動物には糖分が多すぎるのだろう」

慌ててそれに手を被せ、尚もつつこうとしているのを止める。

「びい、駄目です、駄目です」

男は雀の体を摘みあげて離れた。その上軽く睨むとぴいいと怯える。

「俺の瑠璃の手をつつくな」

鳥は小箱に放され、蓋を閉められた。

「毒……とても美味しいのですけれど……」

女はしょんぼりして、残り一つある包みを見つめた。

「お前が食べる分には問題ない」

え、と忽ち顔を輝かせる。

「ところでお前、それはどこで手に入れた？」

「御執事様に頂きました。瑠璃が頑張ったご褒美なのです」

銀の包みを丁寧に開いて、四角い茶色の固形物が現れた。旦那様も、と差し出す。

「お敵しいけれど、ほんとうはお優しい方なのです」

旦那様と同じく……と言って女はぽ、と頬を染めた。男は無言で立ち上がった。

「なつてねえな、川野」

「は、申し訳ございません」

執事は跪き、男は腰掛けている。少し声が低い。

「ですが瑠璃様の御性格から言うと、九割七分の鞭に対して三分の割合で飴を与えるのが最適最短で手懐けられ」

「ばき、と男に蹴られた。姿勢と位置的に肋骨が折れる程ではないが、それでも手加減は無く思わず呻く。」

「失礼致しました、今のは言葉のあやでございます、若君」

「違う」

男は薄く笑っていた。これはまずい。寵姫に好感を持たれば多少なりとも反感を買うだろうとは予測していたが、思った以上に怒りを買っている。

「お前は弁えわきまえがなつてねえんだよ、川野……」

ぐり、と手が踏みつけられた。

「以前はどうあろうとあいつは俺の妻となる女。それを分かっているのか？」

「承知致しております、若君」

手を引くことなく、顔も顰めることもせず畏まって答える。

「いいや分かつてねえ」

靴は離れて、足は組まれた。だがやはり静かな声音は変わらず、

頭は上げない。

「言うに事欠いて手懐ける？ お前がそれ程までに瑠璃を侮蔑しているとは思わなかった」

「申し訳ございません。つまり、信賴して頂くと申し上げたかったのでございます」

黒靴に向けていた目線を訴えるように見上げると、見下ろす冷たい黒眼があつた。しまつた釘付けられる。どんな残酷な罪人も縄を掛けられずとも動けなくなるといふ。その威圧が今直に自分に向けられていた。後ろで控えていても金縛りに似た感覚を催すのだ。今は、虎の前の薄汚れた鼠だつた。

「お前のその齒に衣を着せない物言いは、無駄な婉曲を省き嘘がなくていい……」

微笑……脂汗が浮かび　そして鋭い黒刃が一拳に振り落とされる。

「だからこそ、お前の本心であることが許せねえ。瑠璃の気持ちを踏み躪つた事が許せねえ！」

「は……っ」

詰まっていた息を吐いた。激しく動悸している。失禁する者すらいるのだ。堪えたが、体の震えは抑まらなかつた。これ程の怒りを買ったとなると、本当にそのままの意味で首を切り落とされてもおかしくなかつた。自分の言葉、いや考えが、これ程の　例えば幼子を嗜虐して手にかかる程の重罪だとは思ひもよらなかつた。いや違う、これは若君自身の純粹な怒り。法で裁けるものではない。大切なものを侮蔑された屈辱……例えば自分にとって

「申し訳ございません、若君……！」

ぼたぼたと落ちる涙の粒を床に見た。無念と怒りと悔恨が、溜まつた排水が一拳に出口を求めるように押し寄せる。

男は静かに立った。

「お前には失望した、川野」  
一人、部屋に残された。残されても、顔を上げる事ができなかった。それは自分にとって、死ねと言われるより重い言葉だった。

「ん、んむ……」

キャラメルを口一杯に頬張って、男を見つめる。

山のような箱が傍らに置かれて、ベッドの上、男の指で甘い菓子を口に入れて貰った。夢かと思うほど甘く蕩ける気分だった。

だけど次々と口に入れられ、なんだか様子がおかしいと思った時には既に、もう飲み込めない程のキャラメルが口に詰め込まれていた。

「はんな、はま……？」

喋ったと同時に涎が零れ出る。慌てて拭おうとしたが、手は抑えられた。男はくすりと妖しく微笑み、髪を撫でた。

「美味しいか？瑠璃」

こくと頷く。甘い涎が垂れる。

「よしよし」

男は唇を舐めた。びくんとする。こうやって組み敷かれて、そうされるだけで体の芯が熱くなってしまうのだ。それだけでなく、男の手が撫で降りて行くともう快感に襲われる。

触られた部分が異様に熱を持ち、そして別の部分に疼きを伝えていた。

辿りつかないで欲しいという思いと早く辿りついて欲しいという思いがごちゃ混ぜに掻き回されて、結局辿りついた時には溢れ出ている。手は抑えられて涎は拭けない。

「こつちも欲しいんだな？」

ふるふると首を振っても虚しく、四角い異物感が擦じ込まれて体が跳ねた。やはり次々と押し込まれて、とろとろと蕩けていく……

毒……

自分が犯されているのか、男が犯されているのか、もう判らずに妖しい微笑を眺めていた……

## 七・

「若君、どうかお許しを……！」

頭を床に。まさか自分がこんな様になるとは思わなかった。自分だけは特別な気でいた。

幼い頃より最も身近に仕え、忠誠を尽くしてきた自分だけは

暇を言い渡された。

「旦那様……」

顔を上げればまだ恨みがましい眼を向けてしまっかもしれない。

申し訳ございません、えりか様……

「どうかお許しください。私はここを出て行く場所などありません」  
ここで生まれました。侍女をしていた母は自分の弟になる筈だった赤子を流し、しかし病弱だった若奥様に代わってその嫡子の乳母となった。以来母は献身的に若奥様に仕え、自分も常に嫡子の傍に仕えた。家柄で言えば霧崎の使用人を統べられる身分ではない。ただ若君に

「そうだろうな」

くす、と笑う声が聞こえる。

「家を出れば人は皆同じ。俺とお前と瑠璃と、何が違うか言ってみる」

「違います、若君……」

それでも貴方は私に取っては違うのです。例え仕える家がなくなっても

「失せる」

「……！」

はつきりと、無情に言い放たれた言葉　若君がお言葉を覆す事はない……

「旦那様！」

高い、鈴の鳴る声。

「るりは何のあったか分かりませんが、どうかお許しになって下さい。御執事様はともよい人です」

ぐ、と拳に力が入る。こんな時にでも感じるのは 屈辱……

奴隷なんて、本当はどうでもいい。醜い感情を隠す為の、正当である為の理由付け……

どうして若君は、そのようなものに……

ずっとお傍で見守りしてきた私わたくしよりも、貴方様はそのような娘を大事になさるのですか……

私に、もつと美しさがあれば……

私が、奴隷であれば……

愛でなくて同情だと、せめてそう縊るしかなかった。人でなく人形だと、信じ込むしかなかった。こんなことがあっていいのだろうか。いいや、夢を見ているのだ。誑かされているのだ。どうか目をお覚ましになって下さい

最後は病むように痛ましかった、奥様の無念が流れ込んでくる。どうか涙を拭いて下さい。貴女は誇り高い、若君の真の奥様です。奴隷などと言わないで下さい。貴女は凜として誰よりも美しい。

私が必ずやえりか様を

申し訳ございません、えりか様……

顔を上げ、立ち上がった。

「お世話になりました、若君」

黒い背に向かって、深深とお辞儀をした。

申し訳ありません、母上……

自分も背を向けようとした時 袖が掴まれた。  
「るりも行きます」

「瑠璃……！？」

驚いて男が振り向く。

「瑠璃様……？」

流石に自分も状況が把握できずに掴まれた袖を凝視する。

「るりはまだ御執事様に習わなければなりません。お約束をしました。るりはお花嫁の修業をするのです」

男に向かって、場違い甚だしく照れた様子で微笑む。

「るりは七日間でいになります」

「瑠璃……」

男はなんとも言えない微妙な表情になっていた。呆気を取られ、苦笑し、それでもまだ厳しさは保ったような。しかしそれはふいに、ふ、と優しく微笑む。

「お前はそのままでもいい」

しかしぐ、と掴んだ。

「るりは行くのです」

あの銀色の真っ直ぐな眼差しで、それが今若君に向けられているのだろう事が分かった。

やがて軽く溜息を吐いて、しかし優しくげな眼差しを返していた。それはまるで、愛人へと言うよりも、成長した愛娘に向ける慈愛のような瞳だと思った。

しかしそれがふいとまた自分に向けられると、途端に厳しい目付きになる。

「俺の言葉に二言はねえ」

瑠璃の意思ならば俺が止められることではない

「一週間後、瑠璃を連れて帰って来い」

分かったな？川野、と睨んでいるが、穏やかな余韻が残っていた。若君の怒りが解けている……そうでなければ、まともに立ってなどいられない。これまで誰にも 自分にも、えりか様でさえも、若君の怒りには触れられなかったというのに…… 不思議な娘だ。

「かしこまりました、若君」



膝を付いて、承った。それが例えどんなに皮肉な事でも。

それが若君の命令ならば、私はいつも通り完全完璧に果たして見せます。瑠璃様を一週間で、どこに出しても恥じることのない淑女に

パイ、と傍で鳥が鳴いた。

「旦那様、パイを連れて行ってもよいですか」

「はつきりさせて置くが瑠璃、それは俺のじゃねえ」

小鳥が肩に乗り、揃って小首を傾<sup>かし</sup>げていた。

## 八・

「御執事様はきやらめるが好きなのですか」

くにくにと噛みながら言う。明け方から晩までの特訓も終わり、漸く一息着いた所だった。

別荘には他に三十人の使用人と二人の執事が用意された。事からも若君の寵愛振りが伺える。しかしそのお陰で、自分は取りまとめの仕事もせずに、ただこの特訓に全ての時間と配慮を割いていた。何を憂いても仕方ない。今するべき仕事はこの一つのみ。そしてあくまで仕事であってそれ以上にも以下にも理由は無い。

「いいえ」

そっけなく返事はしつつ、テーブルを片付ける。

「るりはあまり好きでなくなってしまったのですが……」

くにくに噛みながら言う。全く不思議な娘だ。

「少し、えっちな気持ちになります」

ぼ、と頬を染めた。全く不可思議で破廉恥な娘だ。

「けれど、我慢するのです。れでいになるまではじいもしないのです」

なんだか今さらりと耳を疑うような言葉が聞こえたが、余計な勘ぐりはしないのが有るべき執事の姿というものだ。

「瑠璃の淹れた苦い珈琲が飲みてえ……」

舌がおかしくなってしまう。異国まで行って知識と技術を身につけてきた給仕人が淹れたものだからこれが本当の味なのだろうが、いや以前はそうであったのだが、今はあの磨り立ての墨のように黒々とした色と鼻腔を麻痺させるほどの芳しい香りが恋しい。

それでも珈琲を飲み干し、とん、とカップをソーサーに置いた。いつもならここで、あいつが嬉しそうに笑ってくれる。意外とあ

いつは笑わない……いや違う。それを言えば俺や他の人間など全く笑わない。作り笑いでないあの笑顔が、恋しい。

恋しいと言つて、まだ二日の夜だ。後五日……軽い絶望まで覚えた自分に今更ながら驚く。大体あいつは俺と離れていても何も感じないのか。きつと感じないのだ。自分から七日も離れると言つなんて。苛めなきや良かった。

はあ、と溜息を吐く。

書類をばらばら捲つて、うんざりした。どうせこれを終わらせても瑠璃と遊べないんだろ？ 煩く言う奴もいないし……

何て、前は誰に何を言われなくても機械的にこなし、何も感じなかったことだ。

『今までなんと味気ない世界にいたのかと思うようになります』

もうあいつのいない生活など考えられない……

くす、と笑った。

全く、とんだ腑抜けになったものだ。気分を切り替えて散歩でもして来ようか。

「あ、や……」

気持ち良さそうな表情で、ぴくんと指を動かす。

全く、何て扇情的な顔をする。

ぱたんとその部屋を出る。女は今、美容マッサージを受けていた。若君の玉に傷は好色なことだ。一体、どうにかできないものか……理想で言えば、あの娘を追い出し、えりか様に戻ってきて頂きめでたく若君と結ばれる事だ。あれ程似合う二人を見た事がない。血筋、知性と品性、美貌、若君への献身。どれを取っても言うに及ばない。

どうしたものか……

珈琲を淹れながら考える。

例えば、瑠璃様が他の男性に想いを寄せたとしたらどうだろう。駄目だ。若君以上に心を捉える人間が現れる筈がない。いや手っ取り早く既成事実を作ってしまったえば……駄目だ。あの娘は確か孕まない体だ。第一、若君の怒りたるや恐ろしくて考えただけで身の毛がよだつ。その上今度こそ、もう一人の人間も寄せ付けなくなってしまうかもしれない。

堂々巡りにはあ、と溜息を吐いてしまう。後は……

不運な事故……

「とてもよい香りです」

びく、とポットの注入口がずれ、焦げ茶の液体がテーブルクロスにかかる。

「あ」

そう言つてレースのハンカチーフを当てる。

「ごめんなさい、るり、急に声を出してしまつて」

「いいえ、失礼致しました」

冷静な態度でそのハンカチを受け取る。どうぞ、とコーヒーを差し出した。

「あの、るりはコーヒーの苦手なのですが、れでいは飲まないといけませんか」

「いいえ、瑠璃様。ですがもしも招かれた席で出されたならば、茶席で茶を頂かない事と一緒に。招いて頂いた方に失礼と言わずとも失望を与えてしまいます」

分かりました、と言つて席に着く。そこに西洋の菓子を置いた。

小さな円盤状の、緑と桃色の菓子だ。

「これは」

「マカロンというものです。茶と同じく、甘味と一緒に頂けば一層苦味の奥深さを引き立てることができるでしょう」

「ころんころんしてとても可愛いです」

指で転がしたので嗜める目を向けると、あ、と言つて慌てて指を引つ込めた。

こくりこくりと飲み終わる。舌に触れないようにと頑張っていた。

「如何でしょう」

「とても美味しかったです、……お菓子は」

小さく付け加えて、申し訳なそうな顔をする。

「るり……淹れるのは得意なのですけれど」

「淹れる練習も致します。今の正しいお味を覚えて下さい」

「はい、御執事様」

不味いのを顔に出さないよう頑張って抑えている、という顔ならば合格点だ。

## 九・

ぴいー

情けない鳴き声がした。もしやと驚いて縁側に寄ってみる。

小太りした小さな鳥が地面ではたばたと羽をばたつかせていた。

「お前……瑠璃の鳥か？」

じつと見るが、いや違う。微妙に嘴の形や羽の生え方、色も違う。別にあの鳥をよく見ていた訳ではなく一目見れば正確に覚えられるものだ。

「まあ違うなら関係ねえ」

ぴしゃりと障子を閉めた。

しかし。

ぶつ……

「は……」

障子から嘴が見えた。紙を突いて、嘴だけが覗いている。

「てめえ……」

反対の障子をぴしゃんと開ける。

ぴい、と鳴きまさかそれを見計らったようにばたと室内に入ってきた。

「待て！」

しかし手の届かない所を飛びしかも中途半端に降りては止まり、また羽を散らして飛び立つ。書類の紙束が崩れインクが倒されて黒く濡れる。

ばち

「捕まえたぜ……」

手を開き丸々した小雀を睨む。ぴい、とまた情けなく怯えるように鳴いた。そして……ころん、と胡麻粒のようなものが手の平に

落ちた。男の口元が引き攣る。

「賤の出来てねえ鳥だな……」

その怒りを含んだ笑みに、反応したかは知れないが手の筋の強張りは伝わったのか、雀はぶるぶると震えた。

「どうでしょうか」

自信有りげにそのカップを差し出す。先ず、黒い。これは墨汁だろうか。いやこの瞬く間に服に染込みそうなきつい香りは、それが珈琲の成れの果てであることを告げている。嗜好品というかこれは毒に違いない。

しかし、出されたものは飲めと先ほど自分が教えたばかり。口を付けない訳にはいかない。後で胃薬を用意させよう。

「頂きます」

カップを持ち鼻の呼吸を止め、舌に付けた。

瞬間<sup>むせ</sup>咽た。

ごほごほと咳き込む。ついでについでを装ってカップを零した。黒い液体が染込む。なんと。茶色の染みにならない。黒のままだった。

「あ、あ…… 大丈夫ですか、御執事様」

零れた液体に呆然としていたが、そしてすぐに背に手を当ててさするようにしてきたので立ち上がり離れた。

「不味いというか、それ以下です」

口元を拭きながら答える。え、と衝撃的な顔をする。

「旦那様は喜んでくれたのですが……」

まさか。

「若君がこれを全て？」

「はい」

なんと。流石若君 ではない。頭が痛くなった。若君のご健康が……今まで気づかずに申し訳<sup>わたくし</sup>ございません。全て私の不届きです。

珈琲豆の減りが異様に早いのは、若君に倣って屋敷の者がこぞって珈琲を嗜んでいるのかと思っておりました。

「瑠璃様……予定は変更です。この毒液を少なくとも人の飲み物にするまでは、次に進むことはできません」

「毒をお飲み物に…… はい。とても難しそうですが、るり、頑張ります」

意気込む娘を見て、嫌味が全く通じないのは幸か不幸かについて再考の必要があると痛く感じた。

ぴい、ぴいと嬉しそうに蒸した米粒をつついてる。体は普通の雀より一周りも小さいが……子雀という程ではないな。自分で餌を食べる。ただしあの飛び方の下手具合はなんだ。部屋を荒らすなど雀程度の小脳で考えられる訳がなく、つまりあれは木を飛び移る程度にしか飛べないということか。この太った体の所為だろ。

無言で餌箱を取り上げると、また煩くぴいぴいと騒ぎ出し羽をばたつかせた。

更に無言で紐で嘴をくくりつけた。これで鳴けないだろう、とふと嘲笑う。雀如きが俺に催促しやがって。

「瑠璃がいなくて残念だな」

あいつがいたら当然こんな事はしない。せいぜい、それがこの鳥の為だと入って外に放してやるついでに爪の一本を折ってやるぐらいだ。

瑠璃が飼っているあの鳥にしても余り慣れると野生に帰れなくなるだろうとは思うが、瑠璃が楽しんでいるのなら鳥の真の幸せなど知ったことではない。いや、瑠璃の玩具なんて幸せに思え。ただし瑠璃の前で死んだりしたら可哀想だから暫くしたら隠れて放そう。戻ってきたら殺そう。

ところでこの鳥はどうしようか。静かになったが邪魔に変わりはない。



このまま外に放ってしまえ。運良く紐がどこかに引っかかって外れない限り餓死して死ぬだろうが、まあそれが俺に逆らった罪だ。鳥といえど俺の手に脱糞するなど、親類縁者もとい都の雀を全て焼き殺して根絶やしにしないだけ有り難く思え。

俺の前に惨めな屍骸をさらされるのも気に食わないから、これは遠くで放そう。そうだ、あそこがいい……。くすりと男は微笑した。

「宜しいでしょう」

一口飲んでカップを置くと、ぱあと顔を輝かせた。既に日はとぼりと暮れ、カップは百にも連なっている。

「美味しいでしょうか、御執事様」

「一昼夜程度の訓練で若君の舌を満足させられると思うなどおこがましいですが、まあ下仕えの技量程度にしては合格点です」

「満足、合格……」

言葉を拾い娘は嬉しそうにはにかんだ。

十・

「瑠璃様、何かお話し下さいませ」

「え」

ディナーの席に着いている。女の向かいには、男が着席していた。もう前菜は済み次の料理が運ばれていたが、それまで一言も会話はなくしいんと静まり返っていた。女は神妙な顔つきでそろそろとスプーンをスープの中に入れていた。が、話しかけられて手を止める。「瑠璃様も大分マナーは身に着いて来ました。ですが、元々食事を囲むのはそのように緊張する為ではありません。人は会話を楽しみ、より打ち解けていくものなのです。私のような者が本日瑠璃様と同じお席に着かせて頂いたのは、瑠璃様の会話練習の相手を務めさせて頂く為でございます」

「は、はい」

上ずって返事をする。

「どのようなことを……」

「何か共通の話題ですと宜しいですね」

うむ、と女は懸命に考え出した。しかし接点などあるはずはなく沈黙が続く。手を止めずにと言われてスプーンで掬った液体を口に入れるが、美味しくて思わずほっこりとした。旦那様にも　あ。

「御執事様が旦那様とお出会いになられたのはいつですか」

ぴく、と向かいの男の手が動いた。そのままスープを飲み込んでから、静かにまた掬う。

質問を咎められなかった事に満足して、倣って自分も掬う。

「　若君がお生まれになられたばかり、私が八つの歳の頃の事でございます」

「旦那様がお生まれに……旦那様も、赤ちゃんのようでしたか？」  
「いいえ」

また掬って飲む。合わせて、また掬って飲む。

「若君は 生まれた時よりも賢明で、泣き声を上げない赤子でした」

眼は夜闇を見るように黒く……褒めやかされても笑わず、怒られる理由など無く、ただ無表情にまるで生まれながらに無常を悟ったような瞳で……それは正直に言って子供ながらに寒気を覚えた。乳母の意味も無く、乳を飲まなかった。飲むに値しないと言っているのか、いや これほど生に執着をしない赤子がいるだろうか。それは人間である本能ですら持ち合わせていないようだった。

……畏怖を覚えた。それは例えば村に生まれた子ならば鬼の子と言われあるいは捨てられたかもしれない。しかしこの霧崎家では反対の扱いだった。皆明王の化身の如き畏怖を覚え、まだ言葉も発しない赤子に恭しく跪いた。

「るりも泣かなくなつたようですが……赤ちゃんの時は」

泣く子はいなくなるのです、とぼつと言ってからスープをまたこくと飲む。

飲み終わって、スープが下げられていく。

「えりか様は、いつに……旦那様と、」

「若君が八つになられる頃です」

「八つ……りゅうの頃です」

女は何か得心したように頷いた。神妙な顔になる。

「それからずっと、旦那様とえりか様はご一緒だったのですか」

「ええ。とても仲睦まじく御交際をされておいででした」

女の銀の瞳を見つめ返して、執事は答える。

初めて若君に人間味を感じた。

『川野……』

『はい、若君』

『女は分らないな』

初めて瞳に優しい光を見た。初めて同じ人間である気がした。その微笑は、常にどこことなく浮かんでいたそれまでの冷笑とは異なるものだった。

えりか様が若君を変えた……

「それは奥ゆかしく、文を交わし時々会って話をするだけで若君とえりか様は十年も互いを想い合いました」

「お話を……」

魚の料理を口に入れてはいるが噛み切れず、中々飲み込めなかった。

「ですが若君が十八となり、遂に成人を迎えられた日……」

確かに若君は約束の花束を持ってえりか様を迎えにいかれた。祝言の用意は整っていた。しかし 若君はお一人でお帰りになった。花束を手を持ったまま……

『川野……』

『はい、若君……？』

『女は分からないな』

それは酷く人間的で 酷く苦悩に満ちた瞳だった。そして冷たい微笑みを浮かべて花房を手に乗せ……崩れ、花びらははらりと儚く散っていた……

「若君は私にでさえ、えりか様との間に何があつたのかを一言もお話してはくれませんでした」

そしてその日以来霧崎家では若君の御誕生の日を祝う事が禁じられた。他でもない、若君自身の命によって。そして今も……

「若君のお心にはあの日が留まったままだと思つのです……そして今も」

「えりか様のことを……」

しん、と静まった。二つの皿の上には、未だに魚料理が乗ったま

までであった。

「かちや、とフォークとナイフが置かれる。

「申し訳ございません。このような若君の私情に触れるような事までお話しするつもりはなかったのですが……折角のお食事を、味気ないものにしてしまいました。本日の事は反面事項　いえ、どうかお忘れ下さい」

むぐ、と言って女はようやく口の中のものを飲み込んだ。

「宜しいですよ。私も、今夜はこれ以上頂けそうにありません」  
そうして執事は席に立った。

回って、女の椅子を引く。

「御執事様……」

女は手を取られ、立ち上がると心細気に男を見上げた。

「るりがれでいになったら……旦那様にお喜び頂けるでしょうか」  
「存じません」

執事は短く答えて、手を離れた。

廊下を行きすがった。ん、と目の端を疑い立ち止まる。

普段は目を合わせもせずに互いに過ぎ合うが……

「何だ、それは」

男は振り返り、二間離れた男をまじまじと見る。

「親父」

「千次……」

父、総一郎の肩にはどこかで見た、あの丸々と太った雀がちょこんと乗っていた。

どう見ても目を疑う。馬鹿か。それもよりによってあの親父が。シニール過ぎて笑えねえ。

「今朝、私の居室わたしの前庭にいたのだ」

相変わらず厳格な顔のまま、淡々と答える。

「嘴が紐で留められていた。上質な紐だったから、恐らく家中の童子の悪戯だろう。子供は時に残酷な事をする……とは言え私の行き届きが甘かった所為だ。割り出すような事はしないが、皆には厳しく言い含めておいた」

雀は自分の顔など一夜で忘れたようで威を借るが如くふてぶてしく肩に乗っていた。

「川野の留守中に家の風紀が乱れたとあつては示しがつかんぞ。お前も自分の使用人には霧崎家中としての身の振る舞いについて今一度ただすように」

では、と言つて踵を返しかける　いや、だから……

「で、何であんたの肩にそれが乗ってんだよ」

「……」

背を向けたまま、動きを止める。

「その丸々した体付き……野生にしては随分肥えてるな」

くす、と笑う。

「見つけたのは『今朝』か？」

「違う。飼ってなどいない」

総一郎は振り向きざま弁解した。落ちないようにぴいと肩が鳴いたのを気にする。

「数週間前に、雛が落ちていたのを見つけたのだ。親鳥もなくそのまま捨て置くのも気が引けたが、しかし私情で使用人の仕事を増やすのも筋が通らないから仕方無しに少しの間面倒を見ることにしたのだ」

ちゅ、ちゅ、と頬に口付けるように懐いている。厳格で通つてる男が部屋では雀と戯れている姿が浮かび、不覚にも口端の筋肉が上を向こうと引きつく。

「へえ……」

総一郎の額には汗が浮いていた。

「本当に、一度は放したのだ。飛べるまでに成長したから野生に返そうとした……しかし親に飛び方も教わず、上手く飛べなかったに違いない。捉えられたのが童子だったからまだ良かったようなもののこれが犬や猫だったらと思うと……私の所為だ。未だどうやって返せるかは分からないが、このまま無責任に放りだす訳にはいかない」

「ま、頑張れよ」

くるりと背を向けた途端、一気に顔の筋肉が緩む。ああ、早く部屋に帰って腹を抱えて笑いてえ。

《もしもそんな男がいたら相当に痛ましい、独り身の男だろう》

まさかあれが親父のだったなんてな。

「千次、」

おっと、と思つたらすぐ背後にいた。どうでもいいがその雀を俺の視界に入れるな。

「分かっている……」

何が？

「すまなかった……お前の為には、新しい妻を娶るべきだった」

は？

何だ……飲み込めねえ。何で雀からそんな話になった？しかもやめるよ？流石に吹き出したらずうな空気は判るが、さつきから俺は腹が擦れるのを耐えてるんだぜ。

「病弱だった母も幼い頃に亡くし、私も暫くお前を見るのが辛く遠ざけていた……お前は父にも母にも 誰にも甘えた事がない。いや、甘えられなかったのだ」

「……」

「お前が手の掛からない事に甘え、私は素知らぬ振りをしていた。

……今更父親の振りをしたところでお前が耳を貸さないのは当然だ。目も合わせたくないだろう。初めにお前の手を跳ね除けたのは私なのだから……」

家紋の刻まれた藍色の背を見つめる。

「千次、私は」

「言っな」

背を向けたまま男は阻んだ。

「そうだな」

総一郎は肩に乗る雀に手を伸ばした。

「今更 だな」

背後で男の足音が遠ざかっていく。……聞こえなくなったところで、男はふうと息を吐いた。 笑えねえよ。何だよ、今更……それで俺に

ぴい

……。 変な汗を背に感じ、振り返った。



「それで俺にどうしろと……？」

「つまり、この俺が雀に見立てられたということか？」

ぎろと睨んでも箱の中の雀は間抜けにぴいぴいと鳴く。

「まあそう気を立てるな。十割零分でお前が悪いんだろ、折角差し伸ばされようとした手を拒むから」

何が可笑しいのか笑いながら湯呑みを出され、しかし取り敢えずそれをずすと啜る。

「未だに分からねえ。雀とどう関係あるんだ。実は体よく押し付けられただけなんじゃねえか」

「成程、中々やるな。それでお前はまんまと顔を合わせ辛くなつて返しにも行けず、かつさも意味有りげに託された雀を見殺しにも出来ず今に至るというわけか。つまり」

目の前の男は片目を瞑って見せた。

「困った時のこの光次郎様という訳だな。いい友達を持って羨ましいぜ、千次」

「瑠璃がいらないから暇なだけだ」

不機嫌な様子で答えた男にやはり笑みが漏れる。

「なんだ、お前。まさかとうとう瑠璃ちゃんにも振られたのか」

「振られてねえよ」

「で、どこに？」

「別荘だ。俺の為に何やら特訓をするらしい」

「特訓？何の」

「花嫁修業だとか……川野が前から教育させると煩かったしな」

「ほお……よく行かせたな。お前が瑠璃ちゃんを他の男と二人きりにさせるなんて」

「川野はそういう奴じゃねえ」

「どうだろうなあ。主人のいない別荘で執事がその幼な妻候補に特

訓か……今頃何の教育を施されているんだろうな？」

男は倦怠極まりない目を向ける。

「お前は低俗だから嫌いだ……」

「それが何か？大体お前に言われたくないな。どうせお仕置きだとか言って変態的な事を強いているんだろう。瑠璃ちゃんが可哀想だ」  
「……………」

「言い返せよ！何か逆に気まずいだろ」

「お前と無駄この上ない言い争いをしに来た訳じゃねえ。聞きてえのは唯一つ」

鋭い目を手元の直ぐ横に向ける　もう一人の男もその視線先を見つめ冷静迅速な決断に至った。

「引き取る訳ないだろ。身心寂しい独身男じゃあるまいし、何が悲しくて雀の世話をしなきゃいけないんだ？」

「だよなあ……」

何も知らずにちゅんちゅんさえず囀る雀に目を向けて、男は深い溜息を吐いた。

## 十二・

「あつあつ、駄目です、駄目です……やめてください」

泣きそうになりながら、女は必死に離そうとしている。背後から男が近づいた。

「何してるんだ？お前」

覗くと、二匹の雀を離そうとしている。女は振り返って涙目で見上げた。

「あ、旦那様……ぴいとぴい次が、喧嘩をするのです」

「……別の箱に入れるよ」

それと、なんだその名前は。喧嘩を売っているのか？いいや、こいつに限っては思い過ぎだ。

「けれどるりは、お二人で仲良くして頂きたいのです」

「まあ仕方ないだろう。鳥にも相性があるだろうしな」

そんなことより、と女を後ろから抱きしめる。

「七日振りに帰ってきたんだ……。もつと俺に甘えろよ」

「あ、はい旦那様……」

ひょいと抱き上げられて、横顔を見上げた。ぎゅと小さな拳を握る。

「瑠璃、瑠璃……」

輪郭を確かめるように体の隅々を手が撫でていく。

「あ、旦那様……」

胸を包むように男の手が被せられ、女は上からそれを押さえた。

「少し、少し待ってください、旦那様……」

「何だ」

男は素直に手を離し、おずおずと見上げる女の髪を手櫛で梳いて

やる。

「るり、旦那様とお話がしたいです」

「何だ？」

ちよつと訝しげな顔をして、しかし愛おしげに髪を撫でながら促す。

「え、と……」それでいて女の瞳は彷徨った。

「るりは何をお話したらよいかわからないのですが……」

何だそれは、と男に笑われる。

「るり、珈琲を淹れられるようになりました」

「へえ？それは楽しみだな」

「それと、るり……森のボートに乗りました。湖の上をぶかぶかして、とても気持ちの良かったです」

「へえ」

「るり、テーブルクロスは白いのが一番好きです……」

「ほお」

それで？と男は訊いて来る。

「それで、それで……」

「何だ、何か欲しいものがあるなら言え」

「そうではないのです。ただるりは、……旦那様、お紅茶は何が一番好きですか」

「グレイ」

「え、とるりは……」

男は頭を撫でる手を止め、奇妙そうに女を見やった。

「さつきから 話って何だ？」

「え、あの……」

「もういいだろ？七日も待ったんだぜ」

「む、」

男は口付ける。深くその中に割り入って、小さく温かい啞内を味わった。

唇を離せば、もう女の目は潤んでいる。男はくすと笑って女の肌

に手を這わせた。

「やつ」

しかし手が払われる。男は驚いていた。

「嫌……？」

「あ、そうではなくて、るり、もっと旦那様とお話してから」

「その話に何か意味はあるのか」

う、と涙が溜まる。

「るりのお話は、つまらないことと分っていますが……」

「そんなこと言ってねえだろ」

男が身を起こし、少し眉を顰めた。

「どうしたんだ？帰ってから少し様子がおかしいぜ」

「……………」

女の瞼は少し俯き黙っている。

「旦那様は……るりはえっちなないと嫌ですか」

「嫌だ」

女はますます睫を伏せる。

「……えりか様は」

小さく呟いた声が、寝室にいやに響いた。

「何故あいつの名前を出すんだ」

男の声は途端に鋭くなり、女を睨む。

「つまりお前は、俺に好きなだけ無駄な話を聞いて貰い、誰よりも愛してると囁かれ、気分の向かない時は腕枕だけをして機嫌を取って貰いたいんだな？ 他の女と同じように」

吐き捨てるように言葉が接がれ、女はびくりと身を震わせる。

「違います、旦那様。るりは違います。るりは他のお人とは違う……」

「……」

「るりは元の、奴隷なので……」

ぼろんと涙が零れる。

「何故そういうことを言っただ……」

男は遣る瀬無く女を見つめた。女はしゃくりを上げ始める。

「よ、よいです。旦那様。るりは旦那様に抱いて頂きたいです。とても幸せなことです。るりの体が旦那様のお役に立つのなら、とても」

「もういい」

男はごろんと向こうを向いた。

女は泣いたまま、もぞりとベットから起き上がる。もぞもぞと肌着を直し、降りた。

寢室の扉を閉める間際、男の背姿を目に焼きつけ小さく呟いた。

「ありがとうございました、千次様……」

「瑠璃様……」

居間を抜けて廊下に出ると、相変わらずの整った燕尾服姿の男が控えていた。

「ご、御執事様……」

鼻水を啜りながら、女はごしごしと顔を擦る。ぐしゃぐしゃの笑顔を向けた。

「るり、れでいにはなれなかったようです……」

胸ポケットからハンカチーフを取り出して、執事は女の目元に当てた。

「ご、ごめんなさい、御執事様……」

それで顔を隠すように覆うと、小さな顔は白い布の中に収まる。

執事は触れず、呟くように答えを返した。

「存じ上げぬ事です」

眠れぬうちに夜が明けて、結局はそくだ優しく抱きしめようと決めた。

だが朝には女も執事も姿はなく、ただ一匹の雀だけが残されていた。



十三・

「……流石に茶化す気になれないな」

ソファに頂垂れるように座る男を何とも言えない心地で見やる。取り敢えず茶を置いてやった。男はちよつと顔を上げて、手を伸ばしかけたがやはり途中で諦めた。

「お前は逆説的に不幸の星の下に生まれたのかもなあ……」

《完璧な能力、外見、家柄……俺は》

「総てすべを持って生まれた男 後は失うだけか」

何も返さない。皿に出した玉羊羹に楊枝を差すとぷちりと薄皮が弾け飛んだ。

「まあ自業自得だな。どうだ？初めて味わった挫折の感想は」

「体の一部を失ったような感覚だ」

男はぼつりと口を開く。

「あいつは他の女とは違うと思っていた……」

「お前は『他の女』をどう思っていたんだ」

「虚事こじごだ。全て偽りと幻想。女に限らない。人も事象も須らく、不浄の世には欲に塗れて生きるが定め。貴賤虚しく総ては無に帰す。喩え戒め悟ったところで、人は人の形から逃れられはしない」

「新しい教えだな……全諦宗なんてどうだ。その名の通り、人生全て諦める」

「それならばあいつが菩薩だ。冷たい水に漂う体を手に掬われた……」

黒い瞳はどこか遠いところを見ていた。

「あいつを抱いた時 心が張り裂ける程の哀しみが流れ込んだ。そして気が狂う程愛おしくなった。彷徨い果て欠けた魂が包み込まれ、知覚の全てが吹き飛び、この世に体二つと魂一つになる。瞳も



肌も内臓も全て蕩けて交じり合い、肉塊も魂も一つとなって哀しみの快樂の渦に沈んでいく……」

「ところが女は男のそんな小難しい感傷なんか知る由もなく、求められるのは体だけだという錯覚に陥ிட்ட訳だな。いや錯覚でもないか、男は体を繋ぐことでしか心の繋がりを感ぜられなかったんだからな」

「同じ気持ちでいるような錯覚にいた……互いに互い無しでは生きられないと」

「ところが漸く見つけた筈の魂の片割れは、腹心の部下と手を繋いでどこかに行ってしまったと。まあ、失恋は傷がでかい程男の肥やしだ。今夜は付き合ってやるから元気出せよ」

ぽんと男は肩を叩いた。

手を開いて、ぺとぺとになった黄土色の塊を見つめる。

「お捨て下さい」

新しい銀色の包みを傍らに置く。

「御執事様……るり、どうすれば……」

「いつも通り、何もなくて結構です」

うぐ、と俯くが膝にころんと乗っているすずめを見て顔を上げた。「けれど、るりもお役に立てると思います。るりは上等なので……」自分の体をぎゅと抱く女を睨み下ろし、厳しい目を向けた。

「私としては今すぐにでも首を吊りたい所存ですが、貴女は放つて置けば直ぐに春女にでも成り下がるでしょう。若君の御寵愛を一度でも受けた御身でそのような不埒は許しません」

ベットに腰掛けた仏蘭西人形と子雀。絵画の題目のようなその心もとない姿を見下ろして、ふうと細い息を吐く。

「こうなってしまった以上、私がお世話申し上げるしかないのでしょう」

「……御執事様にはご家族がいるのではないのですか」

「おりません」

父は知らない。母は吐血して死んだ。最後にはほとんど一人で世話をしていた……それを誇って最期に笑った。

「御執事様は、旦那様がとても好きです……」

「いいえ……人は一人では生きられないのです」

女はそつと顔を上げて、灰がかつたその瞳を伺う。

「るり、御珈琲を淹れます」

「……頂きましょう」

「俺は人間なんだよ」

とおんと酒瓶を置く。手酌した杯を仰ぎ、喉がぐびりと動いた。

「おい、お前そこらにしとけよ……」

空いた一升瓶が数本も転がっていた。

「足りねえ。おい、酒を持って来い」

据わった瞳で睨まれ、傍を通り掛った店員がいそいそと奥に引込む。

「……完全な酔っ払いだな。つつかお前強っ、そろそろ酔い潰れるよ」

突然ぐてりと頭を台に置いた。紫の京漬けを見つめて、ぼんやりと呟く。

「えりかも川野も……あいつまで、素晴らしい方だとか言いやがる。

……俺はそんなじゃねえよ」

「分ってる。お前はただ表情と感情に乏しい普通の人間だ。能面を被り、求められた通りの完璧な姿を演じ続けた。観衆が崇めているのは舞台上のお前……今更面を捨てると言われても、その下はもうのつぺらぼうだ……そうお前は思っている」

「薄っぺらい人間だ……心を開いて下さいなどと言われても、鼻からそんなもの持ち合わせてねえ。俺は作られた人形なんだ……」

「少なくとも、人形の叫びが聞こえたんじゃないか？えりか姫には」

「えりかは居もしない俺に恋をしていた……」

男は自嘲するように笑う。

「こんな俺を見たらどう思う？あいつを連れて来てくれ。ここには飲んだくれしかいない。お綺麗な、あいつの千次様はどこにもいないだよ……」

漸く酒の火照りが差した男の顔を見やり、溜息を吐く。

「そしたらお前を抱きしめてこう言うだろうな、『えりかがいますわ、千次様』……これでめでたしめでたし、か？」

「馬鹿か」

ぴんと指に弾かれたとつくりが転がる。

「馬鹿はお前なんだよ……」

転がされたとつくりを受け止め、光次郎は睨む。

「いいか、言つたよな？俺は『千一郎』とは一生友達になんかなる気はないが、お前は俺の友達だ。ここにいる、霧崎千次はな」

「……………」

「本当、馬鹿だな。えりかさんも川野も、お前の親父さんも瑠璃ちゃんも、お前が完璧だなんて思っちゃいねえよ。そうじゃなきゃ、傍に居て力になりたいなんて思うか。ちよつと近くで見れば、お前の薄っぺらい化けの皮なんてお見通しなんだよ」

びしゃん、と男の顔に酒がかかる。

「孤高なんかじゃない。お前が人を遠ざけるのはびびってるからだ」  
店員が持ってきた一升瓶を受け取ると、立ち上がった未だ頬を机に付ける男を見下ろした。ぽん、と栓を抜く音がする。瓶は逆さまになっていた。濡れるような男の黒髪を濡らし、衣を濃く染め上げていく。ぽたん、と最後の一滴が男の背に染みこんだ。

「脱げよ、千次。こうなりや今夜はとことん付き合つてやるぜ」

顔が拭われる。濡れた衣を脱ぐ。男は立ち上がった。

「上等だ、光次郎……俺に喧嘩を吹っかけて次の朝日が拝めると思うなよ」

拳を鳴らした男の表情を見て、ふ、と光次郎も笑う。

「そんな千鳥足でよく言っぜ。今迄の恨みここで晴らさせて貰っぜ、千次！」

自らも前衣を肌け、拳を構える。

バキ

.....

.....

朝、とある酒屋の二階では青痣だらけの男が二人倒れていた。

(終わり)

\*

\*\*\*

手からちゅんちゅんと生の米粒を啄ばむ。

すっかり体は成長し、もう子雀とは言えない大きさだった。

今は部屋をすいすいと移動する。

「もうお前、飛べるだろう」

瞳が合うと、ちゅん、と言って羽をばたつかせた。

男はそれを手に乗せたまま、障子を開けて縁側に出る。

「行け」

腕を上げ、手を開く。反動で雀は手を離れてちゅ、と鳴いて飛び上がった。ぱたんと、すぐに障子を閉める。だがまだちゅんちゅんと聞こえる。振り返ると、障子に穴が幾つも空けられていた。男は黙って机の引き出しを開ける。障子を引いた。

ちゅん

泣くような声と共に飛び入ってきて、男の肩に止まる。男は片手で雀を捕まえ、嘴を持つと手に持っていた挨拶紐をしゅるりと当てた。ぶると震え、途端にぴいぴいと翼をばたつかせて暴れ出す。男の手が緩んだ隙に手から飛び立ち、そのまま振り返りもせず一直線に空に昇って行った。男は太陽に重なる小さな影を目を細めて見つめ、呟く。

「落ちねえよ……俺の一字をやったんだからな」

「おい千次、」

「間に合っている」

「未だ何も言っていないだろ……」

「近頃口を開けば女を紹介してやるとか言って、俺を釣りにしているだけだろう」

「ほう、相変わらずの不遜健在だな。失恋して少しは矯正されたかと思っただが。まあいい、女の傷は女で直せ　てことで、いいこと連れてってやるよ」

「せめて夜誘ったらどうなんだ？ 昼間から放蕩な奴だ」

「嫌ですね、千次さん。何の店を想像しているんですか？ これだから盛りの付いた男は。普通の喫茶店ですよ」

「何が悲しくてお前と喫茶店に行かなきゃならねえ」

「まあ最後まで聞けよ　看板娘がめちゃくちや可愛いらしいぜ。どっちが先に口説き落とせるか勝負しようぜ」

「唯一お前の見上げた所は、負け勝負に挑める事だな。敬意を表して、今回は不戦勝にしてやろう」

「待て待て。そこで珈琲好きの千次君に耳寄り情報だ。何でも、そこで新しい珈琲が大繁盛しているらしいぜ」

「新しい……？」

「きゃらめる珈琲だ」

「乗った」

何か呼ばれたような気がして筆を止め、総一郎は障子を引いた。

誰もいなかったが、ふと天を見やって目を細める。厳格な口元が緩んだ事に自分では気付かない。

二匹の雀が、比翼の鳥が如く大空を舞っていた。



（終わり）（後書き）

次は、えりかと執事と、悪企み？（仮）冷えた夫婦関係をなんとか打開しようというえりかが奮闘します。風呂に押しかけたり瑠璃をお茶に誘ったり媚薬を盛ったり？……そして遂に？



あの方の後ろを、とことこと付いていく娘を見ました。

中庭を挟んであちら側の廊下を歩いていましたので私の姿には気

わたくし

づきません。それでも柱に身を隠して伺います。あの方は桶を持ち

後ろの娘は胸前で綿布を二つ重ねて持っています。どうやら湯を浴びに行くようです　二人で。

「千次様、」

席を立て離れる前に呼び掛けました。

霧崎家では夕食は家族揃って頂くのが慣例です。ですからお義祖父様とお義父様と勿論あの方とそして妻である私の四人が揃います。そしてこの時間が唯一……一日の中で必ず私とあの方が顔を合わせる時間なのです。

それで呼ばれてあの方はきちんと止まり振り返ってくれました。

「少しお話したいですわ、千次様」

「すまないが、余り時間は取れない」

一瞬の間も迷いもなくまるで初めから用意されていたかのような滑らかで丁寧な返事が返って参りました。

「昨夜、お見かけしましたの……」

では時間のある時にまた、などと言っては永遠にお話はできません。立ち話のまま話し掛けます。

「御入浴は、湯掛けの者が別にいるのですからあの娘を連れなくとも宜しいのではないでしょうか……」

精一杯の勇気を出して言ってみました。今晚言おうと決めよく考えて練習もした台詞です。あまり責めるような口調ではなくあくまで提言として。

「いや、もうあいつで慣れてしまったから勝手が分かっているいい」

何と言えば……

「えりかがお背中を流しますわ」

は、として自分の顔がみるみる赤くなっていくのを感じました。

私は今なんと破廉恥なことを平気で……お義祖父さまとお義父さまがもう退室していたのがせめてもの救いでした。

「貴女はそんなことをしなくていい」

くす、と笑われてしまいました。最早恥ずかしさで茹でたこの様になってしまい、それ以上何も言葉を接げませんでした。

部屋に帰りぱたんと扉を閉めました。顔が熱い。恥ずかしさの為だけではありません。今日は面と向かってお話をしました。そして私に私に……笑いかけてくれました。

笑いかけてくれた……

私が次に取った行動は驚くべきものでした。

ずっと風呂場の前で待っています。

ご家族の方は 私も含めてですが、それぞれにご自分の風呂場を持っていらつしやるので誰かと遭遇するということはありません。もしも総一郎様などと顔を合わせる事になったら私はもう恥ずかしくてこの家には居られないでしょう。……それほどの事を私は今しています。使用人がするような事をする為に殿方の風呂場で待ち伏せをしているのですから。約束も、していないのに……

ですがあの方はこう言いました。

『貴女はそんなことをしなくていい』

これは、遠慮……皇族の私に使用人のようなことをさせるわけにはいかない、という意味でしょう。……ということは私が構わないのであればそうしてもいい……そうしてくれたら本当は嬉しい……かもしれない

そういう訳で私は小数時間も立ってそこにいました。廊下は外に

面しているのでまだ肌寒いです。ですが何時来るか何時来るか、来た時にだらしなない格好ではいけない、と瞬く間だったと思います。そして。

遂に、

「えりか……？」

大分夜も更けてからいらっしやいました。やはり後ろにはあの娘が控え体を拭く布だけをちょこんと両手に乗せています。

少し驚いたような顔で見、それからすぐさまこちらに早足で向かってきます。体が強張り途端に情けなくなりました。私は何をしているのでしょうか。厭きれ追い返されるに決まっています。

ふわり。そう、包まれました。暖かで良い香りに。

半纏を掛けられていました。それがあの方のだと分かるまで少し時間がかかりました。分かったときには瞳に熱いものを感じました。それを堪えます。

「……………」

何をしているんだ、とは言わず黙って背を向けました。何をしているかなど賢明なあの方に推察できないはずがありません。それで尚背を向けたことは、拒絶の意でした。

「えりかが千次様のお背をお流し致します……！」

私は叫ぶように言っていました。

止まらず行ってしまう。暖簾をくぐります。しかしそこで振り返りました。私をではありません。あの娘が付いてこなかったからです。

「瑠璃、」

促すように言いますが、しかと娘は見返して尚そこに立ち止まっています。

「るりはお先にお部屋に戻っています」

「……………」

黙ってぐいと引っ張りました。あ、と声を上げましたがさほどの抵抗はせず、なんだか哀しそうな様子で手を引かれていきました。

ちらと私と目が合った時は申し訳なげな顔をしました。かっ  
と体が熱くなりました。

何よりも同情に私は打ちのめされたのです。

あのような奴隷風情に、人形もどきに……妻である私が同情され  
たのです。その屈辱は私の中で燃え上がりました。女の、妻の意地  
としてここで引き下がる訳にはいかなかったのです。

かおん、と戸を引くと音が鳴ります。

流石に風呂場の中で、追い返されるということはないでしょう。

私はあの方が衣を脱ぎ浴場へと入る頃を見計らって暖簾をくぐったのでした。というよりも先ず殿方が脱衣する場を覗くというか目にするということなんてそんなこと、私にはとてもそこまで破廉恥にはなれませんでした。だって夜の伽の時などは薄暗いですし。ですから明るい元に裸を見るなんてこれは酷く決死の行動だったのです。

湯けむりの中、風呂椅子に座るあの方とその横で膝を付き湯桶に布を濡らして泡立てている娘が見えました。ほっとしたのはきちんとあの方は腰に布を巻き娘は白い肌衣を一枚纏っている事でした。それは下着同然の姿でしたが何もないよりはましです。私はいえば上掛けは何枚か脱ぎ侍女のように裾と袖を捲り上げて紐で止めた状態でした。娘がこちらに気づいた素振りをみせたので、というか幾ら広いといっても静かな浴場ですので戸を引く音でさえ大きすぎる程響くのであの方も気づかない筈がないのです。それでも黙って前を向いたままでした。

主人の背と私を見比べるようにちらちらと眼球を往復させていたのですがやがてもう十分に布が泡立ってしまったていたようでそれを持ちあの方の背に回って濡れ布を当てました。つまるところ二人して無視を決め込んだのです。

私はかつとなると気が強くなってしまうのでそのままあの方の元へと進んで行きました。

「お貸しなさい」

布を取り上げて膝を付き、もう半分も泡塗れになったその背に布

を当てます。心がぎゅうと熱くなりました。何か感動のようなものです。

本当に何も言わず素知らぬ振りしているので私もごしごしと当てました。それはもう私は気が強くなっている状態でしたのでその背を責めるように力任せに擦り、あの方の男性にしては白めの肌はひりひりと赤くなっていました。あの方は依然動じず娘はおろおろとしてただ横で見っていました。

ですが背が終わると今度は私が戸惑う番です。前に回って……？いえいえ、いえいえ。しかし布を返すのは癪なので肩へと移りました。少し横に向きですが目は決して合わないよう他を見てしまわないようその腕の肌が泡立つのだけを見て少しずつ滑らせました。すっかりと力のか細くなってもすると落としてしまいそうです。

「千次様の御浴場はとても落ち着いていますわ……」  
おもむろ徐に口を開きます。気を紛らわすように。

実際内装はとても質素に思えました。私のところは浴槽が四つあり一番広い普通の湯に加えて薬草湯とぬるま湯と美肌の為の白色湯が常に用意されサウナもありました。

ですがここにあるのは悠々としていたとはいえ一つの浴槽だけです。とはいえ私の家だって浴槽は一つでそれもお母様と共用していたのですがこの家は驚くほど何から何まで贅沢ですっかり慣れてしまっていました。貴族は皇族よりも潤った生活をしているのです。

実家に較べても造りが地味過ぎる感じがしたのですが、ただ浴槽に一面に面したお庭の景色だけはそれは見事なものでした。四季折々の美しい風情が楽しめることでしょう。

私はそれを褒めました。

「夫婦で湯に浸かるというのも風情のあることではないでしょうか……」

ちよつと頬を赤らめて逞しい腕だけを見ながら言うとそれは突如、手が重なりました。ぼつとして反射で手を引っ込めてしまいました。そのまま何事もなかったようにあの方はご自分で体を洗い出

しました。

何ともできず私もあの娘もただそれを横で眺めていました。  
ざばりと湯に泡が流されていきます。

新しい白布を腰に巻きなおして振り返ります。

「洗おう」

それは私に言っているのか。

呆然としていました。反対横には娘がいます。けれど明らかにこちらを向いてそう言ったのです。その言葉が耳の中に反芻し木霊こだましていきます。

洗おう、洗おう、洗おう……

「い、いえ、そんな。大丈夫ですわ、私は、そんな……そんなつもりでは。お気を使って頂かなくて結構です。私は、後で別に洗わせますので……」

「そうか」

呆気なくそう返事が返り肩透かしをくらったような惜しい気持ち  
がしたのは言うまでもありません。断らなくても良かったのでは……  
…折角の仲直りの機会を……。

「瑠璃、」

「はい、御主人様」

じめじめと考えている間になんとということでしょう、娘があの方の  
足の間に座りました。信じ難い光景です。あの方の膝の上に腰掛  
けているのです。そして、新鮮な泡が娘の白い肌を滑ります。愕然  
としていました。それも慣れたような一連の流れ……別に私に当て  
つけてそうしている訳ではないのでしょうか。きっとこれが日常の光  
景なのです。

……いつもいつも、あの方に体を洗われているのです……！  
「降りなさい！」

気の強い私が言いました。

「恥を……知らないさい……！」

涙が零れそうでした。湯煙が私の顔を朧にしてくれていたらしいのですが。

「けれどるりは、」

私を見上げて、大きな青い瞳で言いました。

「御主人様がるりを洗いたいで、洗うのです。るりの決めることではないのです」

ほんとその頭に手が置かれました。

「すぐにこういうことを言うんだ、こいつは」

笑って言います。ですが少し哀しそうな微笑で。

「何も言い返せないだろう？……」

そして優しく泡を伸ばしていきます。泡で泡を洗うように肌を傷つけないように丁寧に愛おしげに大切な人形を洗うように……

「……………」

立ち尽くすより他はありませんでした。

とさんとそしてぺたんと尻と膝を床に付けました。

「千次様は、おかしいですわ……」

こんなな普通なのにこんなな普通におかしい事をする……そして壊してしまったのは私なのだと胸が締め付けられていく。

「……………」

ふいにあの方が何か人形の耳に囁きました。

びくりとそれは全身を震わせそして頬を赤らめました。

あの方のくすぐる様な手つきにびくんびくんと体を震わせ出します。とてもいやらしい……体を洗っているだけなのにまるで人が愛撫を受けているような反応で体を振ります。頬は紅潮し目をぎゅつと瞑ったりして……そして胸の部位に触れた時。

「あ……………」

とうとういやらしい声を漏らしました。そうするとあの方の手つきまでそのように見えてきます。いやですわただ人形を洗っている



だけなのにあれが変な声を出すから……

円を描くように丁寧に洗いそしてその先まで指の腹で捻るように洗ってやります。

「ふ、う……！」

背を弓にして胸を張り自ら手で口を塞ぎます。何を勝手に……そうやって扇情的な姿を見せて煽ろうとしているのでしょうか。それも私の目の前で。

ぷっくりと膨らんでいます。熟れた果実の様な綺麗な橙色……胸は……意外と膨らみがあり柔らかく弾力がありそう……ですが私の方が　なんて、私は何を較べているのでしょうか。比べるまでもありません。

最早布を置いてけぼりにして指が臍に滑りました。びくりと震えて恐ろしそうに体を硬直させています。腰が少し浮きました　指が下方に滑りくちゅうと音を立てました。ぽろりと涙が零れました。

……あの娘と私と、同時に。

もう見るに耐えられない。

吐き気までして駆けるように風呂場を逃げ出しました。

そのままそのまま捲り上げた格好で人目も気にせず自室に駆け込みました。途中で一人二人使用人とすれ違ったかもしれませんが知りません。

ベットに潜り涙を流しました。あの後……今頃なんて考えたくもありません。ですが、あの娘

とても、気持ち良さそうでした……

「御主人様……？」

女が駆け去つてとおおんと扉を閉める音が反響した。反動でまた少し開く。湯煙が逃げ行つて肌寒い空気が流れ込んで来た。

男はふうと溜息を吐いて扉を閉めに行く。戻ってくると手桶で湯

を掛け流し泡を落としてやった。女はもじと脚を擦り合わせる。

「御主人様、るり……」

「ああ、すまなかった。部屋でな……」

男は立ち湯殿の方へ行ってしまった。浸かって庭を眺めていた。

三・

……出たくありません。

夕食の用意が整ったと侍女が告げに来ました。

そんな時間だと分かつていてもう着替えも化粧も直してあるのですがやはり昨夜の事を考えるとどんな顔をして隣に座ればいいのか分かりません。

結局気分が優れ<sup>すぐ</sup>ないと告げ、侍女はするすると下がって行きました。

「やはりえりかさんがいないと雰囲気<sup>きふく</sup>が華やがないのう」

静か過ぎる夕卓。豪華な食事を前にして老父がふうと白く豊かな顎髭を撫でそれから重々しげな顔つきになった。

「霧崎開闢以来、男三人で夕卓を囲むなどこんな悲劇的な事があつたじやろうか。わしは兎も角総一郎まで後妻を娶らないし……」

「申し訳ございません、父上」

厳格そうな壮年の男が手を止め上座に座る父に顔を向けた。その向かいに座る未だ若い男は黙々と食事を口に運んでいる。

「いいんじや、いいんじや。総一郎。今のはわしの愚言<sup>ぐごん</sup>じゃった。

えりかさんが我が家に来てくれたというのに、年老いても欲は尽きないものじやのう。ところでどうじやろう、えりかさんは気に入ってくれとるか？部屋や家具などの設えは」

間があつた。

「父上がわざわざ最高のものを用意させたのです。きっとお気に召されているでしょう」

一拍後答えたのは総一郎だった。今のはお前が答えるべきだろうと目の前の男を目で嗜めるが素知らぬ振りをしている。

「そうかそうか、それならば良かった。ならば千次が腐心して用意させたということに」

「冗談じゃねえ」

初めて柳眉を顰めて男が口を開いた。

「俺があんな悪趣味な訳ないだろう。血の繋がった奴が選んだということすら隠蔽したい程なのに、笑えねえ冗談は止めてくれ」

「千次！」

父親は思い切り睨みしかし動じない。祖父は正直にしょんぼりと気を落として所在なさげに髭を撫でていた。

「そうか、そうじゃな……余計な事をした」

「えりかは、喜んでたぜ」

「本当かの！」

途端ににつこりと気を取り戻す。何故この祖父からあの親父が生まれるんだろう。祖母が余程陰鬱な人物だったに違いない。

「そうじゃ、明日はお参りに行つてこよう。子孫繁栄の縁があるのはどこじやつたかのう。孫の顔を見るのが楽しみじゃ」

ほくほくとして松前漬を口に運ぶ。男がはあと小さく溜息を吐くのを総一郎は見た。

「千次、」

食事が済むと、祖父が初めに退室する。やれやれと流し目で背を見送り立ち上がった息子呼び止める。煩わしそうな黒い瞳が向けられた。

「えりかさんとは、上手くいつているのか」

「あんたに関係ねえだろ」

素っ気無く言い、脇を通り過ぎてガラス障子の出口に向かう。  
「見舞いをしなさい」

背は何も答えずに出て行った。

「川野、」

廊下に控えていた執事に目線を向けると、頷き礼をした。

「万事心得ております、若君」

こんこんとノックが叩かれたのでお粥を下げにきたのだろうと返事をしました。ですが別の声がします。少し驚きましたが部屋に入れました。

「若君からえりか様にお見舞いの品でございます」

果物の籠とお花。この季節には手に入らない上質なけれど当たり障りのないものです。

あの方の執事が花を花瓶に飾る姿が滲んできます。

「若君に何かお言付けを承りましょうか」

流石にできた執事で泣きそうな顔は知らぬ振りで淡々とそう訊きます。許可もなく言われた以上のことをするのは差し出がましい事です。まして主人の妻を下手に慰めたりなどしたら顔を立てるどころか返って叛きにもなるでしょう。

「……あの方が用意したのではないのでしょうか」

ぼつりと目の前の執事を責めるように言いました。

だって本当に心配しているのなら……来てくれる筈です。これはただ形上かたちじょうのもの。

「奥様……お茶を淹れても宜しいでしょうか」

こくんと頷いた。何だか甘えたような態度で嫌になってしまいました。でも私はこの家では一人……連れてきた侍女だって不安で慣れないのですから、私が一番に毅然と振舞わなければなりません。

色よく淹れられた紅茶を飲みます。とても美味しい。流石あの方の執事です。

「出過ぎた事とは重々存じ上げておりますが、えりか様」  
そう口火を切ります。

「無礼を承知で、この川野めの戯言を少し聞き流しては頂けないでしょうか」

紅い液体が震えました。昨日の私の破廉恥な行動についてでしようか。聞きたくない。ですが真剣な様子でした。耳を貸さない訳にはいきません。

「いいですわ、どうぞ言ってくださいまし」

「失礼ですが、若君とえりか様は何か仲違いをされているご様子」  
びくりと体が震えます。

「あの方 千次様が、何か仰っていましたか」

「いいえ、何も存じ上げません。それについて若君は誰にも、一切の口を閉ざしています」

「そうですか……」

そうでしょう……あの方の名誉を著しく傷つけるような事です。

私を氣遣つてなどと思ひ違いは致しておりません。

「若君は許し難き事には徹底しておられる……例え上流でも若君の怒りに触れば処遇は容赦なく、ゆめゆめ氣を害するなど酷く恐れられています」

「ですがその実若君は下らぬ争いには興味の無い方。幼子や親を手にかけない限り若君の逆鱗に触れる事は先ずありません。大抵は冷笑に付しむしろお怒りを買う事の方が難しい。但しそう、若君が許せないのは 弱き者への迫害と信頼の裏切りです」

「裏切り……」

「若君はえりか様を愛しておられる」

「そんなこと、勝手を言わないで下さい」

「そうでなければ妻に迎えはしません。幾ら家の為とはいえ、若君の御意志を曲げられる人間及び事象はこの世に存在しません」

そうかもしれませんが、と少し思いました。生真面目にそんな物言いをするのに苦笑すら浮かんでしまいます。

「その上で若君に蟠り<sup>わだかま</sup>があるとすれば、愛するが故に許せないのです」

真剣な眼差しでそう言います。この人間が愛などと如何にも客観的に言うのはなんだか不思議な気持ちがありました。

「ですからご希望を持ち、決して自棄にはならないで欲しいのです」「ですが……何といえども許せぬ事は同じこと……一度お怒りになられた事を解かれる例外がありましたか」

「例外になれば宜しいではないですか」

澄ました顔で言うてのけます。結局は手立てもない……溜息を吐きます。

「愛を取り戻す努力もしないでお諦めになるのですか、奥様」

「川野……」

こうしてあの方をもけしかけたりするのでしょうか。本当にすみし顔で出過ぎた物言いをする使用人です。いえ、あるいはこれが鑑なのでしょうか。少なくともこの男はそう思っで行っています。

「そうは言ってもあの方は私に取り合ってくれません。……夜いらつしやる事も、稀　いえ、知つての通りひと月来全くありません」「奥様、瑠璃様をご利用するのが得策かと存じます」

今、冷や汗が流れました。何をさらりと言っているのでしょうか。実は何か恐ろしい悪企みに乗せられようとしているのではないのでしょうか。思わず椅子を引きます。

「失礼、誤解をしないで下さい。回りくどく言えば、例えば瑠璃様をお茶に誘つてはいかがでしょう」

「お茶に？」

くす、と笑つてしまいます。あの人形を前に置いてままごとを「恐れながらそれがいけないのです、えりか様」

「何でしょう」

くすくすと久しぶりに笑いながら生真面目で出過ぎた執事を見やります。

「因みにですが、奥様。私共使用人の間では『奴隷』『人形』という言葉は禁句になっております。例えお耳に入らずとも例え瑠璃様に対してでないと言いつても、その言葉を口にした時点で厳し

く処罰されます。尤も、処断しているのは私ですが。ご家族様  
どころか若君すら与<sup>あずか</sup>り知らないことです」

「川野……お前が何故、」

驚きました。何というかそう『こちら側』の人間だと思っていた  
からです。

「其れは私が若君に忠実だからでございます と申し上げるべき  
ですが、えりか様……」

「勿論、私は聞き流すに過ぎませんわ」

「ご賢明なえりか様、源氏の冒頭を思い出し下さいませ」

「……身分の低い桐壺の更衣が虐げられ、それによりますます帝の  
ご寵愛が増したと？」

「か弱きを愛おしく思うのが人の常、守らねばと思うのが男の癖に  
ございます。つまり瑠璃様を煙たがる程に、屋敷ぐるみで瑠璃様を  
応援していると言つて過言ではありません」

気付けば目から鱗が取れるように聞き入っており、川野は続けま  
す。

「思うに瑠璃様は、美しさに比する者が無いと言うより、物珍しさ  
故に比する事ができないと言つた方が正しいでしょう」

ええその通りですわ、と力強く相槌を打ちます。言われて見れば  
ぼんやりと感じていたことのような気がしてきます。

「そもそも、若君が美に囚われているとするのは美は刹那のものと  
する若君の教示に矛盾します。真に若君のお心を捉えているのは、  
端的に言つて瑠璃様の持つ」

一区切りおいて厳肅に言い渡しました。

「幼稚さです」

「幼稚……」これは少し吃驚します。あの娘は冷たく表情も薄くあ  
どけなさとはかけ離れている気がしますが。

「瑠璃様は幼稚です。あらゆる面で足らな過ぎる。故にあらゆる面



で足り過ぎる若君と何か調和が取れているのです」

ああ、成程。それはそれはもう納得してしまったのでした。

「ですが私は、その……」

幼稚ではない、というか幼稚故にあの方を失望させてしまい以来自分に厳しく振舞って来たのでした。

「えりか様にはえりか様のお美しさがあります。いいえ、えりか様こそ気高き真の美しさをお持ちです。若君がそれに気付かない筈がありません」

ああなんと。それは私が…… 私の心をひどく揺さぶる……人の口から最も聞きたかった言葉だったのです。まるで催眠術のようにとどめの言葉が私の心を穿ちました。

「貴女をおいて若君の目をお覚ましできる方はありません、えりか様」

#### 四・

ノックを叩くと入れとの返事があり扉を開けた。

執務机に居た主人は自分を認めるとそれまでしていたであろう事を続ける。見咎めると少し面倒そうに主人は「休憩中だ」と言った。休憩中に何をしているかと言えばあの奴隷に自分の指をしゃぶらせていた。あの奴隷は奴隷で人前でも何の恥じらいも躊躇いも無く床に膝を付け差し出された指を咥えている。恐ろしいのはそれがまるで休憩中に猫に餌でもやっているかのような自然さだからだ。

一応人が入る時には中断させていた事が救いだ。もし自分で無ければ若様は狂ってしまわれたと屋敷中で囁かれ、それは瞬く間に屋敷外での外聞にも関わるに違いない。

これを妻にしたいなどと言う始末だから聞いて呆れる。

誰よりも愛玩動物の如くに扱っているのは若君自身なのだ。現にほら今喉を撫でたではないか。一体何故こんな事に……あれほど凛々しく完璧極まりなかった若君が。

本当に早く手を打たなければ取り返しのつかない事になる。天才の行く末は狂人か廃人と言うが、しかし私がいる限り若君には絶対にそのような不幸な身にはしない。託されたのだから。

いい加減にちゅぷと指を抜き布で軽く拭うと今度はその口に甘納豆を押し込んだ。それをもぐもぐと心なしか嬉しそうに食べている。褒美というところか。絶対に若君は、あれをちよつと賢い猫か何かだと思っている。あの娘もあの娘で人間としての尊厳はないのか。完全に若君に遊ばれているではないか。

「下がってろ、瑠璃」

「はい、御主人様」

漸く立ち上がるが、

「いえ、どうか瑠璃様もお聞きになってください」

主人は訝しげな顔を向ける。

「えりか様が、瑠璃様をお茶にお誘いしたいそうです」

「……………はあ？」

驚くというより呆れた声を出した。

「一体何を企んでいるんだ？川野」

下手に何も繕わない。否なら否で大した事でもない。ただ好意を持っているかもしれないと思わせるだけで十分だ。

「如何なされますか、若君」

「俺を誘ってる訳じゃねえだろう」

肩を<sup>すく</sup>竦め、どうする？と横に目を向けた。

「るり……………」

何故かぼつと頬を桜色に染める。

「お茶に誘われるのは、初めてです……………」

何の疑いも無く嬉しそうに笑った……………笑った？ような、気がした。そのはにかんだ顔は、桜が舞うような幻覚を覚える。覚えるのだ。

だからと言って私は桜が散るのになんの感傷も抱かない。しかし若君は……………

「瑠璃……………」

なんて可愛いんだ、と言わんばかりの目を向けていた。

「しかし心配だな……………」

すかさず、

「何でも、愛顧している洋菓子店で新作のケーキを考案したので是非えりか様に召し上がって頂きたいと言われたそうですが、一人で食べるのも味気ないと仰っておいででしたので瑠璃様が洋菓子をお好みになるとお耳に入れましたところ、それでは一緒にできたら嬉しい、と言付かった次第でございます」

「そうか」

機嫌よく頷く。若君も基本的に人を疑わない。かつ英才的だが男の思考に漏れないところがある。例えば、愛人と妻の仲が良くない訳が分からない、といった。

そして

「試食を兼ねて感想を期待されているが、もしもお忙しくなければ、美的感覚に優れ味覚にも鋭い若君がいらっしやればこれほど心強いことはないとも仰られておいででした」

頼られて気分の悪い男はいない。

「へえ」

「けえき」

きらきらと目を輝かせている娘の頭にほんと手を置く。

「えりかに伝えてくれ。瑠璃と二人で行く」

「承知致しました、若君」

表情には出さずに厳粛に礼をする。

万事私にお任せください。

『つまるところ若君は男なのです、えりか様』

## 五・

「招いてくれて有難う、えりか」

「お招き頂きありがとうございます、えりか様」

朗らかに言葉をかけた男に続いて娘も真似する様にぺこりと礼をする。二人ともお呼ばれらしく常よりはめかした洋服を着、小さな茶会に招かれた事を楽しんでいるようだった。

「こちらこそ、お越し頂いて嬉しいですわ。千次様、瑠璃様」

男の上機嫌はここ滅多に見れないものだった。少し緊張気味ながらももうわくわくとテーブルの上に用意されている洋菓子に気が行っている娘を微笑ましげに見ている。

「俺も瑠璃もこういう席での作法は良く知らないが、失礼があつたら許してくれ」

「いやですわ、千次様。お茶を楽しむのに特別なマナーなど必要ありませんわ。茶は人を選ばないとは千次様のお言葉ではありませんか。本日はごゆるりと、どうぞ自由に美味しいお菓子とお茶を召し上がっていただく下さい」

「ありがとうございます」

ふわ、と香り頬に口付けされました。それは一瞬のことで、え、と戸惑ってしまいましたが、何事も無くあの方はテーブルに行き先に待ちきれないように待っている娘の席を引いてやっていました。

……ガーデニングパーティー形式とドレスが自然と西洋風の挨拶にさせたのでしょうか。ならば私もそうすれば良かった……知らないなどと言ってあの方は職務で異国人にも招かれしつかりと身に慣れているのです。

私の席まで引いて待っていて下さるのでにこやかにそちらに向かい席に着きました。

「とっても美味しいです、えりか様」

ひどく嬉しそうな顔でケーキに夢中になっています。ビュツフェ形式でテーブルの中央にはプティ・ケーキが並んでいます。娘はもう三つ四つと頬張っていました。私とあの方は一つずつ皿にケーキを載せて紅茶を飲み苦笑いながらその様子を眺めています。まるで二人に女の子が生まれたらこんな感じとかいうような和やかな雰囲気でした。それほどあの娘はあたかも四歳か五歳児のような無邪気さでありとても何か争うような気持ちは生まれませんでした。

幼い……ふと思い出して笑ってしまいます。こんな表情をするのか……人形に命が吹き込まれて動き出し夢の中にでもいるようでした。

もしも別の形で出会えたなら……そんなことすら思っていました。一人寂しかった家……もしもこんな人形があったら話し相手にして色々着せ替えて連れて行って、きつと一番の遊び相手にして可愛がったでしょう。お嫁に行くからと言って捨てられない

「千次様……」

「ん？」

「あの子……瑠璃さまを、またお誘いしても宜しいでしょうか」

「ああ。そうしてやってくれ。こんなに好きだとは思わなかった……」

……

「え？」

「俺は茶の席以外では甘いものを食べないからな。茶菓子よりも嬉しそくにしゃがって」

笑ってそう言いました。それはきつとあの娘に向けられた表情なのですけれど、ひどく久しぶりに昔の、他人行儀でないあの方の顔を見ました……。もう二度と見ることはできないだろうと思っていた、仮面の下の顔を……。

+++

ちよんちよんと、不恰好な折り鶴の羽をつつとくらんくらんと

揺れた。

それでも会心のできらしい。

何かお礼できないかと頻りに言うので千代紙を渡せば前に教えてやった鶴を何個も折り出した。未だやっていたのかという夜になつてから漸く得心がいく物ができたらしく一つ満足げな顔で持つてきて、えりか様に渡して欲しい、と手渡された。今はソファでこつくりこつくりとまどろんでいる。

全く可愛い、と溜息を吐いた。

「ベットにお連れしましょうか」

執事が入ってきてちらと目を向けそう言った。ああ、頼むと言うと丁寧抱き上げて連れて行く。昔あいつが使っていた四畳程の小さな物置部屋に向かうのをまあいいかと何も言わない。

「若君も本日はもうお休みになられては如何でしょう」

ワインとグラスを盆に用意して帰ってきた。

「お、」

「漸く手に入りました、洪牙利産貴腐ワインでございます」

「糖度が強いので少量で十分だそうです、とグラスに傾ける。」

「待て」

着替えて来る、と男は席を立った。

「香りを愉しんでから、口に付ける。」

「如何でしょう」

「お前も飲むか？」

「薄い琥珀色越しにくすりと笑った。」

「いいえ、毒見に頂いておりますので」

「グラスを傾けて、金色の煌きを見る。」

「……どこで手に入れたんだ」

「奥様のご友人づてで、快く譲って頂けたそうですございます」

「何か可笑しそうに男は笑う。」

「お前は余程えりかが好きだなあ」

「奥方を主人同然に敬うのは仕える者として当然の事です」

「それで、俺に礼に行けと言うことなんだろう。飲んだ後に言いやがって」

苦笑いにも似た微笑をする。

「全く世話の焼ける主人だな」

残りをくいと喉に流すと、鶴を持ち立ち上がる。

「礼を言っておこう、川野」

「千次様……」

揺らめく琥珀色が影掛かった姿を照らす。首筋に麻酔のような口付けを受け、痺れる間に流れるように紐解かれ衣服が脱がされていく。慣れたお手付き……ですが今は身を委ねられる安心と快感に打たれて頬が染まるばかりです。ああ、男らしい……

顕れる胸板……貴方より凛々しい殿方はありません。女が体に見惚れるなどと言うのは可笑しいでしょうか。他の女性の目にも映ったと思うと本当に憎らしい。私が、責められたことではないのですけれど……どうしてこの方だけのものでいられなかったのか、自分が恨めしくて仕方ありません……

「千次様……」

男慣れしているなどと思われたくはないのですが、私も身を尽くし感じて頂きたい……

しかし触れるか触れないかの内に、う、と顔を顰められました。

「千次様……？」

そのまま身を起こしになり、頭に手を当て低く呻りました。

「あの野郎……！」

吃驚していると、影の奥から黒い瞳が私を捉えます。常よりも柔らかな声音で言いました。まるで怒りを包み隠しているように。

「すまない、えりか。ワインで頭痛を催してしまったようだ。今度また」



「いやですわ……！」

手を掴みます。瞳は潤んでいるでしょう。折角　今度なんて無い事は分かっています。

「落ち着くまでどうぞこちらでお休み下さいませ。今は横になられた方が宜しいですわ」

その顔に嘘はないと思います。この方に限ってこの期に及んで及び腰になる筈がありませんもの。ですがそれでも看病したい。後少し二人きりでいたい

「すまない」

しかし手を退け手早く衣を整え直すと遂に立ち上がってしまいました。

「千次様……！」

後ろから抱き付いていました。ぎくり体が強張ったことにこちらが驚きます。きっと自分が震えたのだろうと思ひ直す内に幾らか乱暴に身を解かれ早足で行ってしまひます。今度こそばたと戸を開けて……行ってしまったわ……どうして……私に落ち度が……

やはり触れようとしたのがいけなかったのですわ。はしたない……。でも、愛を伝えたかった……

「おや、若君。どうかされましたか」

廊下に控えた執事から首尾よく盆に載せているグラスを奪うように取り水を喉に流し込む。置いては睨んだ。

「どうかじゃねえだろ、てめえ……！」

「申し訳ございません。口にお含みになった分は吐かないだろうと、一口でも十分効く様に手配しておりました」

しらりとして執事は答える。

「しかしまさか媚薬と分かつて尚飲み干すとは流石若君……感服致しました」

「受けた杯は空けて当然だ」

ふんと顔を背けて廊下の暗がりに行く。

「お待ち下さい、そのままではさぞかしお辛いでしょう。ここはえりか様に」

「ふざけるな。帰る」

「帰られても瑠璃様は翌朝までお目をお覚ましになることはないかと存じます」

早足で行くのがぴたりと止まって振り返った。

「てめえ、瑠璃にも何か盛りやがったのか！」

「葡萄のジュースをそれは美味しそうにお飲みになりました。

ご心配せずとも健康に害はありません」

「……だからお前は嫌いだ、川野」

「若君の御親友様に対するのと同じ言葉をかけて頂くとは、最高の誉れにございます」

「……くっ」

もう構っていられるかというようにまた廊下を進むが、数間離れたところで壁に手を付いた。気分悪そうに下を向く。

「正気を保つのも辛い程でしょう。それでまだ立っていられるとは流石若君です。ですがその状態で痩せ我慢は本当にお体に宜しくない。えりか様の前で痴態を晒したくない矜持も分かりますが、ここは夫婦で助け合い」

「ぐだぐだ言ってねえで水でも持ってこい！」

一喝されふうと溜息を吐く。つかつかと歩いて盆を置くと助けるように肩を組んだ。

男の額には汗が浮き、息も苦しそうだつた。

「仕方ありません。私が責任を持って……」

「俺に触るな！」

突き飛ばすように押し退けると観念したように一番近い元の部屋へとふらふら戻る。

「水を持ってこい……」

「かしこまりました、若君」

慇懃な礼の下で暗影に隠れた執事の口元は僅かに上がっていた。

+++

「るり、とっても良く眠れました、御主人様」

「良かったな……」

晴れ晴れとした顔を見やってどこか疲れた微笑をし、男は力無く朝食に向かった。

「今朝もえりかさんはおらんのか……心配じゃのう」

祖父をよそに、総一郎は息子に目配せし声を顰める。

「千次、余りえりかさんに無理をさせてはいかんぞ」

何も答えず黙々と朝食を食べている。

「何事も量は計り違えるな」

ぴくりと止まり、男は少し目を上げた。

「てめえが黒幕かよ……」

「ワインを用意されたのは御祖父様だ」

注がれようとした食後酒を手で制し軽い溜息を吐いた。

「だからこの家は嫌いだ……」

こうして若君はワイン離れをすることができたのでござい  
ます。

違っただろ……。

## 文月の頃

「えりかを送ってくれ、川野」

「かしこまりました、若君」

緑葉が青青と日に照らさるる文月の頃……

初めてあの方のお家に遊びに行った時のことを思い出します。

出会って 婚約者となつて数年も経つのに一度も家に招かれた事はありませんでした。遊びに行きたいと度々仄めかしてみても、あの方は何もないうつまらないと言うようにかわしてしまうのでした。勿論何があるなしの問題ではなくただあの方の育つた場所暮らす場所をもっと知りたくもつと身近に感じたかつたのです。

それで家に朝顔が咲いたというのでそれにかこつけどうしても見たいと言つて漸く庭を案内して頂けることになりました。それで、本当に偶然なのですが、葉で手を切つてしまい手当てをするのに初めてあの方の家に入ってもらうことができたのです。私は私の手を切つた朝顔にどれだけ感謝を込めたか分かりません。そんな様子を「可笑しな奴だ」と笑われてその朝顔を分けて頂くこともできました。

手の甲は白い包帯で巻かれています。

「ごめんなさい、大したことではないのにこんなに大事にしています」

と言うと笑つて、

「本当だよなあ、それくらい舐めとけば治るのに」

と答えるので少し膨れてしまいました。口を尖らせて甘えます。

「えりか……千次様の点てたお茶が飲みたいですわ」

飲んだら帰れよと素っ気無く言うその口元はですが微笑している

のでした。

お茶を飲めば口、喉、お腹それから正座する爪先までもに温かさがじんわりと滲み渡ります。

あの方の点てたお茶が体を巡っているというだけで体の内が抱きしめられたような気持ちになり、その美しい青竹色に魅入ってほおと溜息を吐きます。

「お前ほど茶を味わう奴は見たことがない」

可笑しそうにしながらも心なし嬉しそうに言うのでした。私が茶を愉しめる人間であることに喜んでいるのです。です。この時は千次様のお茶だけですとは言わずに風流を解する者のように振舞うのでした。

茶器から顔を上げる毎にちらりと盗み見るのですがあの方は庭を見やっていました。私が飲むのが遅いのです。でもこれを飲み終わったら帰らなければならぬのでできるだけ少しずつ味わいました。

静かな時間。狭い茶室に二人きり。いつまでもこうしていたい。夫婦になつたらずっと二人……決められた幸せが確実な幸せが私を幸福の中に浸らせました。

茶も飲み終わり、けれど私は冷や汗が背を伝いそうになりました。  
痺れている。

足が。どうしましょう。お茶の一杯でこうなってしまうなんて、いえ普段はそんなこと絶対にないのですが、あの人だけには悟られたくありません。

ちらと見ると、ふ、と笑ったようにも見えました。見透かされているような……いえ、でもいつだってそんな微笑です。……立ち上がらなければ、いえ、それともさりげなくこの場凌ぎを……

やはり、分かっていらつしやる。あの微笑。そしてどうするのか見ていらつしやる……。こういう時、時々意地が悪いと思ってしまう。いいえ、でも私は立ってみせますわ。貴方の奥方になる者ですもの。

くらり、と足袋を履いた足がよろけました。そして支えられました。

顔が赤くなりましたが、僅かな震えを感じ更に赤くなりました。

くすくすと、笑っているのです。

「面白いなあ、お前は」

「ひ、ひどい……ですわ」

俯きながら真っ赤になっていました。そして足は痺れてあの方に身を預け、というか預けるように支えられそれはつまり抱き合っているのです。

しばし一時、抱かれていました。

薄暗くなってきた茶室に二人きりで。

ずっと……

と思ったのまでまるで悟られたたかのようにふいに離されました。

「もう取れただろう」

普通のお声で仰って何だか抱き合ってるなど勝手に思っただけで恥ずかしくなっていました。はい、と小さく返事をして俯いたまままだ少し痺れの残る足でしか見た目は足取り確かに離れました。あの方が障子を開け、

「川野、送ってやれ」

と言います。かしこまりました、と言ったのは年若い側用人です。一体いつからいつの間に居たのでしょうか。入る時はいなかったのに、ずっと二人きりだと思っていたのに……先ほどのことも いえ、障子越しには分かりませんわ……。

長い廊下を連れられて行きます。その背を見てあの方に送ってもらいたかった、とほんの少し思いましたが随分私が時間を取ってしまったせいです。そんな素振りには全く見せませんが次期当主としてかなり忙しい身なのです。このような大きすぎる家を支える大黒柱となる……その背はどれほど重いでしょう。支えられるだけでなく妻として私が支えられるようにならなければなりませんわ。

それにしてもこの使用人……思えば様々な場で見かけている気が

します。あの方がいつも連れている。それにしても気配無く目立たない……容貌は悪くないようですがまるで華がありません。いい使用人ですわ。と直感しました。主人を影から、そう影から支えるというのが大事なことです。

けれどつまり表でないあの方の様々な顔を知っているということ

……

「あの方は普段どのような方ですの」

「あのような方です」

すぐに返事は返ってきました。

「……なんだかあの方は全て慣れてて……もしかして他に、」

続きは余りに不躰で言えません。と、ぴたと一瞬前を行く足が止まりしかしぶつかるなどと言う間もなくそれは目の錯覚だったかのようにまた廊下を進んで行きます。しかしそれは私を不安にさせるのには十分でした。今の間は何でしょう。

「若君は普段身分の上下無く客人は最後までご自分で見送りになられます。それが茶に招いた客ならただ一度も例外はありませんでした」

「それは私が……」軽視されているということなのでしょう。飲み込みの悪い私に補足するようにつまりと付け加えます。

「今頃茶室で赤面でもしていることでしょう」

え、と今度は私が止まってしまいました。

「嘘ですわ……」

「お信じになられなくても何の問題もありません」

さらさらとこの側用人は言います。まだ若いのにまるで老執事のようになんとという達観ぶりでしょう。流石にあの方が連れるだけあります。

「若君は……」

しかし口を噤みます。その通り、あまり主人について語るものではありません。けれど私は、

「千次様の事、もっと聞きたいですわ」

こう言いました。すると執事は、

「えりか様は未だ少々足がお痺れになつてゐる御様子。御足を解ほぐされてゆかれるのが宜しいでしょう」

そうして手近な一室に入りなんとまあ跪かれて足先を揉まれています。まるでもう妻となつたようなかしづき方です。

「花の名を生まれた時から知る者がいるでしょうか」

ふいに続きのように言いました。

「全てに秀で全て一度でこなす事ができるというのが天才であるならば、若君は紛れも無く天より賜つた才の持ち主。しかし若君が真に飛び抜けているのはその集中力であり、それは若君が万に付け自らに最高基準を課し、常に神経を研ぎ澄ましてきた経年の賜物に他なりません」

「ただ家に恵まれ利発な子は掃いて捨てる程おりましよう。しかし若君がその他子弟と一線を隔しているのは、その御意志です。自負と言つても差し支えない」

「花の名を誰よりも知るのは誰よりも知ろうとしたからに他ならず、それは誰よりも知つていて然るべきであるとする霧崎当主への誇りなのです」

「遊び事は嗜みに身に着けても興ずることは一切なく朝晩研鑽に励み、最早若君がこの世に知らぬものは挫折と　そして女性でしよ  
う」

最後、目を上げ何か私に真剣な眼差しを向けました。

「若君は天才であると皆が言い、そして若君自身が自らそう課すことに何の問題もありません。そうでなければならぬ。しかし若君という天才は霧崎によつて作られもの。脅迫的なまでの自尊心で無情に自らを追い上げた若君の孤高と孤独を理解し、支える者が必要なのです」

涙ぐんでしまふ程真剣な眼差しでした。この方は誰よりも、嫉妬してしまふ程あの方を　想つていらつしやる。まるで腹を痛めた親であり腹を分けた兄であるように



「ご研鑽為されませ、えりか様。恐れながら貴女様は未だ若君を支えるのに不十分でございます。しかし」

誰にも為し得ず何より難しかった事を貴女は既に為し得ています、と続けました。

そうして私はぼんやりしながら送られこの家を出たのでした。この家の敷居を踏む前と後では私は全く別の世界にいるようでした。まだまだこの敷居は高い。あの方が私を家に入れたがらなかったのは無意識でしょうか。ですが私はあの方の為になら何にも怖気づくことなく昇って見せます。夕暮れの中牛車に乗り込む足取りはしっかりとしていました。ぼんやりと、心の奥に染み込んでいく言葉を何度も反芻させながら。

《えりか様に出会われてから、若君はお優しい表情をするようになりました》

主君はもう机に居て書を広げていた。目を上げずに言う。

「着替えて来い、川野　気が散る」

「若君のお衣ではないでしょうか」

「ち、と言って立ち上がる。」

「このままで宜しいでしょう　心を抑え一つに定める良い訓練です」

「俺が何に心揺れていると？」

むきになってこちらを睨む様子に僅かに悪戯心が働く。

「言って宜しいのです？」

「死にたいならな」

「死にたくなどありません、若君が当主となる姿を見届ける迄は」  
衣を一枚脱ぎふん、とまた書に向かった。

浅き花の残り香がふわりと室内を漂う



## はなみずき（前）

妻となつたのは、十三の娘だった。

「ごめんなさい、総一郎様……」

御簾越しに酷く頼り気ない声がする。

「でもどうか、姉さまを恨まないで下さい……」

婚姻間際、妻となる筈だった女は忽然と消えた。催しで出会った異国の将校と恋に落ち、駆け落ちをしたそうだ。家の体面など多少ごたつきはしたが、結局はその妹を娶る事になったのだ。特別感傷はない。この宮家の長女を娶る事になっており、今は事実上この娘が家の第一息女であるというだけのことだ。むしろそんな奔放な者を掴む事にならず良かったと思っている。ただ気にかかるのはけほ、と咳をした。

この娘は体が弱いらしいという事だ。

婚姻前にそんな話は聞かなかった。相手家としても娘を嫁がせなければ経済的抛り所を失い、死活問題だったのだらう。

家族の付き合いどころか宮中行事でも見たことは無くそれは女は濫りに姿を見せないとする家の方針であるということだったが、恐らく伏せがちであった為か、またはその為に作法芸能など振る舞いを身に付けるに至っていなかったということなのだらう。

慌しく、日程を変更もせずに婚儀は行われその式で初めて顔を合わせた。

幼過ぎる。

十三にしても未だ幼い。いや幼いと言う言葉はそぐわない。童子のような活発さとはかけ離れ、大人のような洗練さともかけ離れ、それはまるでさなぎの殻を剥いて引きずり出してしまった、というのが表現に適している。この外気に触れて大丈夫なのだらうか。

皮を剥がれてしまつては幼虫でも蝶でもなく、最早蛹ですらない。ただ秒読みの死を待つだけの、体を持たない命

体に合わない、白無垢に纏われた姿はまさに白繭から半分剥かれてしまつた蛹の仔のようだった。美しいと口々に言われるのは、祝辞に何か褒めなければという世辞なのだろう。光を浴びたことのないような白肌と夜しか目にしたことのないような黒い瞳を持った、この世のものではないような娘だった。

婚儀を挙げて、輿入れはしなかった。突然決まつた事で、奥方を務めるのは様々身の足りないことがあるので三年待つて欲しいという事だった。そういった経緯で妻でありながら未だ実家を出た事はなく、代わりに週に一度程度見舞いをしていた。長くても半刻だが、寝ていれば土産だけ置いてすぐに帰る。失礼無く帰れるのでほつとしていた。未だ御簾越しだが、対面すると心落ち着かず一秒が数時間にも感じられる。現人神あらひとがみと言われる天皇にすら感じない何かしらの畏怖を、この年も離れた娘に感じていた。

「総一郎様……総一郎様の空はどのような色ですか」

……空など仰ぐ事はないが、別に雨も降っていなかったので青であると答えた。

するとくすりと笑う。

色などどこにも無い。光に惑わされているだけなのだと云つた。

「名を……お知りですか」

ある時は土産に持つてきた花の名を聞かれた。適当に用意させた物なので花の種別など知らない。花など実務に関係の無い事だ。答えずにいるとくすくすと笑う。

「私も知りません……誰が花の声を聞いたのでしょうか」

……苦手どころの話ではない。存在が別種だった。

「総一郎様……外に出して頂けませんか」

それは医者に訊いて貰わなければ答えられないと言つたが、心内では散歩などという由々しき事態を酷く恐れていた。

がしかし、少しの散歩はむしろ体に良いと言われてしまった  
そうだ。

徒然<sup>ただ</sup>して庭を歩く。救いなのは、御簾を出ては一言も口を開かなかった事だ。半歩後ろに気配もなく、何故ただ一人で人の家の庭を黙々と歩いているのか分からなくなるが、それで引き返そうと立ち止まると、しやり、と後ろで微かな木霊が聞こえる。

後ろを見てしまうのも躊躇<sup>ためら</sup>って、そのまま一周して中へと戻った。

四半刻にも満たない程度だったが、やはり疲れてしまい熱を出したそうだった。

心配というより不安を覚えた。子など産めるのだろうか。

それ以前に まあ今は考えなくてもいいだろう。何となればある程度の身分の娘を一旦この家の養子に入れさせそれを娶れば家同士でそれ程の問題は無い筈だ。執り行ってしまった婚儀などは合意に沿えば幾らでもうやむやに出来る。

しかし週に一度は欠かさず通った。それが義務だからだ。

「総一郎様はとても……嘘の無い方です」

御簾の内から葉ずれのような囁き声がする。布団から起き上げられず横になっていた。

「総一郎様のような方は他にいません……。私が何を話しても、顔を変えたり逃げ出したりする事はありません。他に人もいないのに人前と変わらずに私に接してくれます……私は総一郎様の前ではいる……」

何が可笑しいのか未だ分からないが、娘はあの独特な、くすくすという声をあげた。恐らくは笑っているのだ。

「総一郎様……人とこんなにお話ができたのは初めてです」

私は話した覚えはないが。何か聞かれない限りただ御簾越しで黙って居ただけだ。

「僅かな……居ずまいの正し方だけでも分かるのです、人がどう思っているか……」

ほつとした。どう思っているか、好感的な別の解釈がされているようだ。

「総一郎様は私が苦手……今まで会ったどんな人間よりも」

否。できるならば汗を垂らし、今すぐここを出て一刻も早く離れたい。しかしそれは。「それなのに、誰よりも礼節を持って接してくれます。習って人にできる事ではありません」

くす、と笑う。

「とても……立派な方です」

あれが十三の娘か。娘の体を借りた、人外の者ではないのか……晴れに降る雨を追って、天を見上げた。

偽りの空か……

何も関係は変わらず週に一度の怯えにも慣れず、三年目は迎えられた。

相変わらず触れれば崩れてしまいそうだったが、周りは目を瞬いていた。庭を自由に歩き、笑う姿に……。

そう言えば変化なのかもしれないが、三年というゆるやかな時間をかけたそれは驚くことなのか。三年立てば赤子も歩く。それがまるで、昨日と今日を比べたように…… 三年は、有ったのか。

《総一郎様……外に出して頂けませんか》

「総一郎様、私、こんなに広い部屋を貰っても使えません」

くすくすと笑っている。

「寝る場所と、庭があれば…… 二人分の座る場所があれば十分ですのに」

そう言っ、八畳の小部屋しか使わなかった。布団を畳み、寝るも着替えるもほとんどをそこで済ませてしまう。

…… 布団とは、

布団が一枚引かれていけばそれは一人分の寢床であり、二枚引かれていけばそれは二人分の寢床だ。枕が二つあれば、二人分の寢床だろう。

一枚に枕一つは、一人分の寢床である。

使用人は、奥様は一人で済ましてお仕舞いになる、と言った。身支度も風呂も 寢床まで。

「体が使えるのに、どうして体を使うという喜びを捨てられるのですか」

……私はどうすることもできなかった。

未だ少女のようであり、脆く、触れたら崩れてしまいそうだった。

それは言い訳だろうが、しかし、私には考えられないし不能のことだった。

恐れていたのは何だったろうか。

恐らく、知らない。何も知らない。

あの黒い瞳が……私を恐れるのを恐れていた。

三年……なんと三年も経っていた。

私が義務を果たせなかったのは、生まれて一度も無かった……これまで。

『総一郎様……』

これでは駄目だろうか。

そんなことすら思った。嫡子……何故子供はそうして生まれるのだろう。あれに触れなくてはいけないのか。義務は果たさなければならぬのか。あれは……触れては崩れてしまうというのに。

『総一郎、側室を取ってはどうかの……お体が弱いなら仕方あるまい』

これでは駄目だ。誰が知るだろう、全て私の責だと。誰に言えるだろう、全て私の責だと。

「総一郎様……私、人の心が分かるのですけれど、」

ぎくりとする。ああ、また、ここを離れ逃げ出したい……

「ただ感情だけ……言葉は、声にならなければ聞けません」

明日、と言ってまた触れずに出て行った。

八畳の間で白い花束を、差し出した。結婚の申し込みをするのに家の花を渡すのはこの家の慣わし……だが思えば確かに未だこの娘には渡していなかった。『長女』には渡した。だが 身は代わつても、心は代わりではないのだ。

「私と……契りを結んで欲しい」

白い花束を差し出したまま、そこで一息の間を飲んだ。

「総一郎様……名を、お知りですか」

百合だ、と答える。いいえ、違います、と答えた。黒の瞳と刹那を見詰め合う。

「ゆな」

「総一郎様……」

初めて人と抱き合った……と思えた。指先も触れる事のできなかった私の手はこの娘の背を抱きかかえ、娘の指の一本一本、十の指を背に感じた……。

崩れていった……何かが崩れて、何か 細い紐が結ばれていった……

すぐに解けていってしまいそうなその紐を、何度も固く結びなおした

一枚一枕、一人……

ゆなは身籠った。嘘のようにただ一度の結び合いで

それを知るのは二人だけで、家の者にすれば奇跡のような祝い様だった。何を奇跡というかは分からないが。

「総一郎様……私、初めてです」

少し膨らんだ腹を撫でてゆなが笑う。



「姉でなくて良かったと思っただのは」

少し膨らんだ腹に触れるとゆなが笑う。

「総一郎様と出会ってから、何度も何度も姉であれば良かったと思っていました。姉であれば、総一郎様はもしかしたら私を……」

でも私は、総一郎様の子を身籠っているこの身は、誰にも代えたくない……」

「ゆなはゆなで良かった……」

黒の瞳から零れた涙を掬った。

心を決めた。

## はなみずき（後）

子は生まれた。名付けた。その瞳はこれ以上ない黒で、妻に良く似た整った面立ちの子だった。

子が生まれてひと月の間……私は確かに、幸せというものがあると知った。

ひと月。

産後も漸く落ち着いた頃だった。妾がいるとゆなに知れたのは、ゆなを抱けた時から関係を絶った。妻と生まれた子を大切にしようという心に決めた。などと、何も言い訳にはなりはしない。言い訳をするつもりもない。謝るつもりもない。

六年は長く、私は男だった。

隠す事でも、妻に告げることでもない。

ただゆなは知らなかった。そして知った。それだけのことだ……。しかし私は、知れたという事実を知ってから妻のところへ行っていなかった。合わせる顔がない？ いや違う。恐れていた……

ゆな……

『総一郎様は立派な方です』

『嘘の無い方』

『他にいません』

『初めて思いました』

『生まれてきて良かった……』

黒い瞳が変わっていくのを、変わっていく黒の瞳を見てきた。薄暗い部屋の中で何も映っていなかったあの闇に、光が点り、蝶を映し花を映し空を映し 私がいいた。

色などどこにもありません。光に惑わされているだけなのです

一筋の光も差さない、深い井戸底の瞳を再び覗くのを……異常なまでに恐れていた。

体も落ち着き、食事も家族と共に取る頃だった。しかしゆなは現れなかった。

体調を崩し、寝込んでいると言う。私の顔を見たくないのだろつ。

産後の回復が芳しくなく、体が弱いのも相俟って再び伏せてしまったということだった。そうだった。行事も欠席、赤子も乳母に任せ切り……

妻の役目を果たせず母として子も育てられない。

元々、ゆなの姉の事があって霧崎家中ではしこりが残っていた。家族というより家臣や使用人の間で、結婚前夜という時期によりにもよって異国人と駆け落ちするなど、霧崎の名を汚されたと激昂する者が多かった。その怒りは何の責任もないゆなに向けられ、人の関わりが少なかった為か余り常識に捉われないゆなの姿に冷たい目を向けたり、特に子を孕むまでは、若奥様と呼んでいなかったりしていた。

私は私の体面の為に妻を守る事もできなかった。家とは私であり、守るべきは家だった……。

だが誰が知るだろう、私の責だと。誰に言えるだろう、私の責だと。

「ちちうえ」

いやこの黒い瞳は知っている……

一年立たずもう歩いた。もう言葉を持つ……

「ははうえが、よんでいます」

後で

と初めてこう答えた。

もう私のものではなかった。昨日確かにこの手に抱いた筈の黒い瞳の子は、今日抱きついてくることも笑顔を向けることもない。それは他の人間に対しても同じであり、私も他の人間と同じだった。

父という名の他人であつた……。

この一年は、私には無かつた。

二年も、三年も無い。

ゆなは肺を患つていた。その事を聞いても、やはり顔を見ずに行けなかつた。

何も不便はない。忙しかつた。当主としてやるべき事は多すぎて、朝夕掛きりでも体が二つもないとゆかなかつた。細事が終われば膨大な大事があり、これは取り掛かつてでも終わりが見えないようなものだつたが、私は取り掛からなくてはならなかつた。何故なら、私は仕事で片時も手が離せず、妻の見舞いにも行けないからだ。

同じ屋敷にいて会わないということが、この家ではできた。家族が何十と暮らし一つの町程の敷地のあるこの家では……。

とんとん、と音がする。蹴鞠を蹴る音だ。規則正しく全く変わらぬ軌道で、鞠が蹴り上げられるのを繰り返す。子供らしい表情は何もない。ただ何か仕事でもこなすように鞠を蹴っていた。

あれは私の子だ。

行つて、抱き上げたつて誰にも眉を顰められない筈だ。あの子供以外には……。

突然鞠は、大きな弧を描いて離れていった。遠く遠く、信じられない程速く遠くにもう見えなくなつた。そしてこちらを向く。歩いてくる。通り過ぎた。

庭を上がり、外廊下にいる私を通り過ぎて、その先へと行つた。黒い瞳は背けられる事も向けられる事もなく、つまり私は存在していなかつた。

五年が立とうとしていた。

だが私にはいつまでも昨日の事だつた。あの日から、何も変わらない。屋敷も何も変わらない。時を告げるのは、黒い瞳の子の背丈だけ……。

手を丸めていた姿も、よちよちと歩いていた姿も、どこにも無い。

書を読み芸に慣れ、最早師すら師と言えない。十年かけてできることを一日でやってしまおうと言うなら、もう大人など幼子に過ぎない。正しく、千年に一人の才児だった。

私とゆなが、たった一度だけ契った子……あれが夢でなかったと明す子供……。

生まれて五年も立たずして、世にできない事は無い。ただ一つ、あるとすれば子である事。父と母を父と母にする事だけだった。いいや、できないのではなくしないのではないか。

私の脚に縋り付き、泣き、あらん限りの力で手を引いて行けば、父を母に会わせる事はできたろう。しかし私に触れる事は無かった。父上と呼ばれる時、父と呼ぶのは父でないと心に刻む為ではないのか。私の仕打ちを<sup>ゆめゆめ</sup>努々忘れまいと、酷薄な父の姿を確認する為に呼びに来るのではないか。それももう、ほとんど必要もなくなっていたようだった。

肺病が移ってしまうから部屋に子を入れてはいけないと言われて、私に言える訳がない。

あの子には誰も指図できない。肺病など関係が無い。行って抱きしめる事ができるというならば取るに足らない事だ。ただ私は、これでまた容易く理由ができてしまった。

妻は死んだ。

昨日出会い昨日笑い昨日抱き昨日子を産み昨日、死んだ。

もつけない。

変わらない。

ただ、子は二度と私を呼びに来る事が無くなったただただ、この世の全てから色が失せたただ……

何も、二度と世界の何をも愛することなどないだろう。

妻に良く似た、あの子でさえも……

くすりと笑って去っていったあの子は　　あの子には、私はもういない。

黒い瞳。あの黒い瞳。ただ違うのは、私を映さないだけ。  
何も色を映さず、ただ夜だけを映したあの瞳……

蝶々を追って、手がぼんと打つ。

ゆな……？

いいや違う。あれは息子の妻。妻にされた娘……。

無邪気で哀しい瞳を持った、あれは

ひらりひらりと逃げた蝶。

蝶々を追って、手がぼんと打つ。

その手が差し出されて、娘はぺたりと尻を土についた。

ひらりと蝶が飛んでいった。飛んで行って、水面に浮いた。一枚の屍骸となって、漂った。

娘は顔を上げない。捕まえたというのに喜ばなかった娘に何か言うが、俯いたままだった。

突如に肩に手が伸び、着物をぐいと下げられた。華奢な肩が露になり娘は驚いて顔を上げる。くすりと笑った。戻そうとするが手首がもつ後ろにまわっている。瞬く間に細い手首が重ねられ、息子の手一つに捉えられていた。

後ろ襟が引き下げられて白い背中が露になる。泣きそうになりながら何か必死に首を振っているが、あれはますます妖しく笑い首元に口を付けた。びくんと体が震えるが、それから耳に何か囁かれてこくと頷く。するとくす、と笑い男は肌蹴た娘を抱き上げる。前だけ軽く整えてやって、運んでいく。

庭を上がり、外廊下にいる私を通り過ぎて、その先へと行った。  
黒い瞳はただ腕の中のものだけを見つめて微笑み、そしてそれ以外は存在しなかった。

蝶を追いかけてようなど思いもしなかった。捉えようなどしなかった。

触れたら崩れてしまうと分かっていた。

分かっているても、手に入れたいのか。

あれは息子が唯一存在を認めたもの。この世で唯一息子を愉しませる、息子の玩具。

刹那で儚い人形

有名。

お前は確かに在って、あの子の中にいる。

あれは私たちが契りあった証。

あの黒い瞳に光を点すことはもう私にはできなくとも。

例えもう二度と触れることなどできなくとも、あれは私であり、

お前であり

私たちの答え。

唯一度契りあった、その答えの行き着く先を見届けよう。

それがどんな答えでも

ゆな、お前と見上げた空は、青だった。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3394s/>

---

瑠璃色アラカルト

2011年10月8日03時12分発行